

k-364

# 神矢田遺跡

—第3次・第4次・第5次発掘調査報告と考察—

昭和47年3月

山形県遊佐町教育委員会

# 神矢田遺跡

—第3次・第4次・第5次発掘調査報告と考察—

昭和47年3月

佐藤楨宏  
佐藤鎮雄

## 序

遊佐町教育長 菅原傳作

第3次第4次第5次の調査も完了し、今回神矢田遺跡調査の最終報告書を出すはこびになつたことについては、関係者の皆さんと共に、喜びたいと思う。

3月現地の埋廻し作業をなし、田園に復元した神矢田にたって、この発掘の推進役をつとめた村上孝之助さんは、涙がでてしまうなかったと、述懐している。おそらく、ここで、炎天にさらされ、或いは、雨の中で、作業したものは、ひとしく、同じ感慨をもつに違ひない。第1次第2次で完了の予定が、第5次まで、おし進められたことは、この遺跡が、充分、世に向う程の価値を蘊するものであると共に、これに当たった方々の、この遺跡に対する愛情と学問に対する追求の熱意によるものと、心から感謝いたすものである。

昨46年3月町文化財保護条例が設定されたが、この年に、この報告書を、世に問うことのできることは、実に大きな意義のあることであると思う。郷土の先住の民の生活を遺跡と遺物をとらして、明らかにすることは、その開発の労に対する我々のできるせめてもの、報恩ではあるまい。そして、その貴重な遺品の数々と、その調査報告書を、将来の人達の為に、のこすことも我々の大きなつとめである。

茲に、この報告書作成に、直接あたってくれた佐藤楨宏氏、佐藤鎮雄氏、団長の村上孝之助氏、山大のみなさん、酒田中央高の大せいのみなさん、田園を快く提供してくれ、物心両面に亘つて協力してくれた菅原克郎氏、上戸のみなさん、町教委のみなさんに、万能の感謝の意を表し、心からこの調査報告書の完成を喜ぶものである。

## 序

山形大学名誉教授 柏 倉 亮 吉

秀峰島海の裡、噴き出た泥流が庄内平野と接するところ、斜面と平坦面と交錯して、その接点は幾折れの屈曲をなしている。この屈曲にしたがって幾折れの小道を辿りながら、私は神矢田遺跡へ近づいていた。昭和45年春、5月のことである。とある曲りを曲ったとき、一瞬、私の眼を打ったのは、山の斜面に点々とある椿の花の紅色であった。一株、二株ではない、次から次へと続くのである。つややかな照り葉、紅い花。立ち止って見ていたら、何とそのほとりの、とあるなりに、赤・青の華やかなヤッケをつけた一群が発掘を行なっていた。この遺跡が神矢田遺跡であった。赤青の群は酒田中央高校の考古学研究部の乙女達であった。つらつら椿の花咲く遺跡！これが神矢田遺跡についての私の強い印象である。

この様ななどりに園場整備事業が計画され、その作業が実施されたのは昭和43年10月である。ブルトーザーが動き出したとなれば、その地上に現れる遺跡は痕跡もなく壊滅してしまうのが常の例である。しかし神矢田遺跡はその点では幸運であった。作業中、片鱗を現わしたその時点で、光らせていた眼にあたり、ひいては手ぐすねにつかまつたからである。すなわち、文化財保護条例を作つて、大いに為すあらんとしていた遊佐町教育委員会当局、考古愛好の血を引いて町内に直通する村上孝之助氏、庄内考古学研究会の推進役を勤める植木・鈴雄の岡佐藤氏、植木君の指導の下に遺跡調査の実績を黙ねてきた酒田中央高校の考古学研究部、これだけの役者が時を措かず活動を開始して、壊滅寸前に遺跡を見ゆめようとしたのであった。天の時といおうか、地の利といおうか、はたまた人の和といいべきか。

その発掘調査の途上、調査団は周辺の遺跡を探索しながら、一見、小さな発見をした。酒佐町中藤崎の砂丘にある遺跡が神矢道と呼ばれていたことを見つけたのである。著者が本文に記しているように、この神矢道遺跡こそ日本三代実録に記されている施海郡西浜であろうことを思わせる。仁和元年（885）の夏6月、石製の鏡が現われて、地方・中央の行政当局を興奮させ、翌年4月にその興奮を再びさせた「出羽国施海郡西浜」こそが砂丘上の神矢道遺跡であろう。神矢田の本道跡も、距離的にはその遺跡と図を同じくし、時代的には一環のものと思われる。

関係者の努力によって、この意味ある遺跡、椿咲く遺跡がその性格を明らかにされ、遺物が丹念に報告されることにはこの上ない喜びである。千百年前の出羽国行政当局はともかく、三世纪前以来、この遺跡に注目してきた先人もまたこの喜びを頼って下さることと思う。

## 序

山形大学講師 加 藤 稔

東北地方に生を享けたわれわれにとって、亀ヶ岡文化の研究はもっとも魅力ある考古学上の研究主題である。私もまた、「神矢田遺跡」の著者たちと、ある時は共に、ある時は別に羽黒町玉川遺跡、東根市蟹沢遺跡、河北町花ノ木遺跡、寒河江市石田遺跡など、最高川流域の鶴文時代晩期に属する遺跡の調査にしたがってきた。しかしながら、それぞれの遺跡での莫大な資料の整理は実に至難の業なのである。40,000点にも及ぶ遺品の整理を短期間に完了し、ここに再び、第3～5次の発掘調査の報告書を完成された、佐藤植宏、佐藤鎮雄の岡氏の努力に敬意を表する。

明治時代の奥羽人類学会の遺跡を椎ぐべく活動を続いている庄内考古学研究会の中核的存在である著者たちによる雑誌『庄内考古学』の統刊と、発掘調査報告書『神矢田遺跡』の刊行とは、最近における山形県考古学界に大きな影響を与えている。同じく庄内の羽黒町玉川遺跡の報告書もわれわれの手で近く上梓される予定であるが、「神矢田遺跡」と並んでこの地方の亀ヶ岡文化の内容が解明されることが期待されている。これも、精密な調査と迅速な整理、そして深い考察に基づかれての報告をいち早く世に問わたる著者たちに触発されたものといわなければならない。

神矢田遺跡は、度数かその片鱗を地上にのぞかせてきた。その中で、鈴木廣三氏と樋口清之氏による有孔磨製石斧の発見と紹介は、この遺跡が、弥生文化に關係するものであることを暗示していたのである。第5次までの調査によって遺跡の南西部に仙台湾地方の福浦島下層式に対比できる弥生式土器群が発見されたことは、庄内の歴史を解明する上に画期的な資料を提供したものである。庄内平野の低地には弥生時代遺跡の発見が皆無にちかい現状であった。今後の、この方面的研究の進展を祈ること大である。

最後に、この遺跡の調査と保存に大きな力となってきた村上孝之助氏に感謝するとともに、5次にわたる調査期間中、山形大学の学生諸君をご教導いただいた、村上、岡佐藤氏および遊佐町教育委員会当局にお札を申し上げ、共に『神矢田遺跡』の発行を喜ぶものである。

昭和47年10月11日

## 序（1つの提言）

### 調査団長 村上孝之助

昭和四十五年この調査を始めてから二年間、前後五回に亘って発掘調査をすすめてその報告書を出版する事が出来る事を歓びとする所である。この調査で気付いた事を二・三述べて序文に代えたい。この遺跡はその名に恥らない石塚の多産地である。発掘されたものと表記を合せたら、千本をこえるであろう。其形も多彩である。次に四石の多い事であり百個に余る数である。発火器具の陶石は考えられない凹み方で、小石器製作台と考えられるのである。凹痕は殆どウシイ刀痕が残っている。凹みが深くなると別の所を使っているし石漠製作作用の白石と考えられるのである。発火用と見られるものも出ているが形が人為的に整えられ凹みも円くや深くきれいに作られているのである。

次に第1次に発掘された高形土器、第四次に発掘された小形の深鉢は変形工字形が施文せられ、或いは朱生原初の土器ではないかと言われ、この遺跡の評価も変わってくるのではないか。石冠の表様一ヶ、第四次発掘一ヶと第一次発掘のスタンプ状土器は陶拍子でないだろうかと言う事である。頂巣器の青海波文も陶拍子の文であろう。先に三崎山から出土した青銅刀子は殷刀と言われ、これも模したと思われる反りのある右衛門が水泉寺に保存されていると昔の事実を考慮に入れ、更に殷の九州製造構造の中からの出土品に陶印模陶拍子があり、この陶拍子は特にスタンプ状土器と同形のものである事を注目すべきである。同様に大河口C式に突然出てくる羊齒状文も原型を殷初期の青銅器に施文せられている横連続文様と似似している点に求められるではないだろうか。殷の甲骨文字に舟の原字もある所から考えると舟航の技術も持っていたと考えられるのである。曆法、測天の術もあったのである。殷の間に亡ぼされても殷人の技術は温存され、青銅文化は永くついていたのである。高松原古墳に伝えられている仏教文化の経路も田原郡洛陽（東郊に中国最初の仏寺白馬寺がある）に源を発している事を考るとして誠に永いお付き合いである事を思わずにはならない。この般文化が日本の篆文後晚期に強い影響を受けている事を考察されると思うのである。日本人は古代から文化の吸収の術に仕けていたと考えられるのである。石斧延石も數個採集したが土中に埋っている時は、灰く黄褐色としか考えられない状態である。殆んど表様である。又漆を塗った彩漆がある容器と刀器である。塗料としたか、接着に使用したかは判然としない接着剤としてアスファルトが使われている。アスファルトは近くの湯之内に自然湧出地があり以前に、石鐵がアスファルト中から採取された記録がある。石鐵の着装には殆んどアスファルトであるが、中には漆と見られるものも二・三點はある様に見受けられる。ここからアスファルトの小塊とこれをかきまわしたと見られる石鐵が出土している。以上特記したい事を抜き書きにしたがその声價は当事者としては甚だ大きいものがあつたと考へている次第である。終りにこの発掘についての関係各位に対して深甚の謝意を表するものである。

## 例　　言

1. 本書は山形県鶴岡市佐町教育委員会が実施した神矢田遺跡発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は次のように実施された。

第1次発掘調査	昭和45年5月2日～5日
第2次発掘調査	昭和45年8月6日～12日
第3次発掘調査	昭和46年5月2日～5日
第4次発掘調査	昭和46年8月5日～11日
第5次発掘調査	昭和46年10月30日～11月3日
3. 本書の第2章第3節と第4章第1節は佐藤頼雄、他の佐藤頼宏が執筆した。
4. 本書の執筆前に資料の整理、検討も完全に終了していない。出土遺物も本書に完全に網羅できず、土器と石器は代表的な典型を抽出して提示する方法をとった。しかし神矢田遺跡の全容に迫っている。もし不備な点があるとすればその責任は筆者にある。
5. 遺物の整理と拓影、実圖図作成の一環は酒田中央高等学校考古学研究部員の協力による。写真は佐藤頼宏が担当し、図版は第1～5次発掘調査で出土したものから選出した。
6. 出土遺物は佐佐町中央公民館資料室に保管する。
7. 謹題は佐佐町長佐藤政雄氏の揮毫による。

## 発　　調　　査　　参　　加　　者

村上孝之助 佐藤頼宏 佐藤頼雄

柏倉亮吉、加藤稔、酒井忠一、川崎利夫、長沢正機、伊藤忍、佐藤庄一、小形利彦

佐佐町教育委員会 普原伝作、藤原及定、遠田実、阿部亮充、佐藤富佐雄、普原洋一

村上良一、阿部幸治、村上とき子、村井仁、普原英子、普原千和子、梶原俊夫

佐藤彦治、高橋栄、池田信喜、坂野大鳳、阿前丈夫、麻原孝子

山形大学考古学研究会 名和達朗、海野丈男、保角里志、松野陽一、安藤政信、東海林次男

酒井功、三部美津子、刺持みどり

酒田中央高等学校考古学研究部 伊藤みき、齋藤能子、青山千明、池田アキコ、守屋星子

深沢由美子、藤原幸子、土井喜美子、渡辺和子、藤田淨子、桜田ゆみ、伊藤みさ子

後藤真理子、住石りつ子、尾崎美保子、奥山忠子、斎藤孝子、清野寛子、長南敏子

相馬美和子、風間雅子、富樫陽子、長谷部広子、阿部弘子、猪俣慶、阿部百合子

高橋咲子、高橋日子女、本田裕子、齋藤由美子、石井みづ子、太田貞子、庄司恵美子

佐佐高等学校社会研究部 横口トシ、普原みわ、佐藤ゆき子、今野俊子、普原麗子、阿蘇則子

地元関係協力者 梅原慎夫、木崎嘉太司、小松昌一、池田純子、狩野長一郎

普原克郎（土地所有者）

## 目 次

はしがき	
第1章　遺跡	2
第2章　第1次・第2次発掘調査の概要	5
第3章　第3次・第4次・第5次発掘調査	7
第1節　発掘調査の経過と層序	7
第2節　遺構	11
第3節　遺物	14
1. 土器	14
2. 石器	44
3. 土偶	54
4. 装身具	55
5. その他の遺物	57
6. アスファルトの附着した石器	59
第4章　考察	60
第1節　神矢田遺跡出土の土器編年について	60
第2節　石器について	75
あとがき	84

## 挿 図 目 次

第1図　神矢田遺跡と周辺の遺跡	2
第2図　神矢田遺跡附近地形測量図	3
第3図　神矢田遺跡発掘地点測量図	8
第4図　第6・7トレント地層断面図	9
第5図　第2号住居跡実測図	11
第6図　第7トレントナローベル第2号石組実測図	12
第7図　第7トレントナローベル第2号石組実測図	13
第8図　土器拓影（1）－第1・3群土器	15
第9図　土器拓影（2）－第3・4群土器	17
第10図　土器拓影（3）－第4・5群土器	18
第11図　土器拓影（4）－第5群土器	20
第12図　土器拓影（5）－第5・6群土器	21
第13図　土器拓影（6）－第6・7・8群土器	24
第14図　土器拓影（7）－第9・10群土器	25
第15図　土器拓影（8）－第10・11群土器	27
第16図　土器拓影（9）－第11群土器	29
第17図　土器拓影（10）－第12・13・14群土器	30
第18図　土器拓影（11）－第14・15・16群土器	33
第19図　土器実測図（1）－第3・5・10・11群土器	34
第20図　土器実測図（2）－第12・13・14群土器	35
第21図　土器実測図（3）－第14・15・16・17群土器	36
第22図　土器実測図（4）－粗製土器	37
第23図　石器実測図－石錐	46
第24図　石器実測図－石錐・石匕・尖頭石器	48
第25図　石器実測図－石べら・不定形石形器・打製石斧	50
第26図　石器実測図－磨製石斧・円盤状石製品・凹石・石刀・石劍・石棒	
石冠・浮子石	51
第27図　石器実測図－石皿・石棒・石錐	53
第28図　土製品実測図－土偶・土版・土器口縁部装飾	54
第29図　装身具実測図	56
第30図　添え道具実測図	57
第31図　アスファルト附着の石器実測図	58
第32図　県内各地の後期初頭の土器群	62

第33図	県内各地の後期中葉の土器群	65
第34図	県内各地の後期後葉の土器群	67
第35図	神矢田遺跡出土の石鎌形態分類	76
第36図	山形県出土の石錐	78
第37図	宝谷溝穴出土の石錐の変遷	80

#### 付 表 目 次

第1表	精製土器の分類と出土量	39
第2表	粗製土器（半粗製）の分類と出土量	43
第3表	出土石器の種類と出土数	44
第4表	神矢田出土の土器分類と同タイプの土器を出土する県内各地方の代表的遺跡	71
第5表	神矢田遺跡の土器群別と関東・東北地方における後、晚期纏文式土器の形式編年対比表	73
第6表	山形県出土の石錐の類型と出土数	79

#### 図 版 目 次

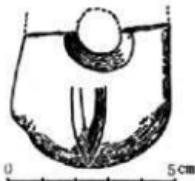
図版1	1. 神矢田遺跡の全景 2. 神矢田遺跡の近景 3. 神矢田遺跡の近景	
図版2	4. 第6・7トレンチ南部の発堀状況 5. 第6トレンチ8区東壁の地層	
図版3	6. 第1号住居跡 7. 第2号住居跡	
図版4	8. 第2号石組 9. 第2号炉跡	
図版5	10. 中期未葉の土器片 11. 後期初頭の土器片 12. 後期初頭の土器片	
図版6	13. 後期初頭の土器片 14. 後期中葉の土器片 15. 後期中葉の土器片	
図版7	16. 後期中葉の土器片	
17.	後期中葉の土器片	
18.	後期後葉の土器片	
図版8	19. 後期後葉の土器片 20. 後期後葉の土器片 21. 後期後葉の土器片	
図版9	22. 後期初頭の壺 23. 晩期中葉の小鉢	
図版10	24. 後期後葉の注口土器 25. 晩期初頭の注口土器	
図版11	26. 後期中葉の粗製土器 27. 後期後葉の粗製土器	
図版12	28. 晚期中葉の小鉢 29. 晩期中葉の小鉢	
図版13	30. 晩期初頭の壺 31. 晩期後葉の壺と小鉢 32. 晩期初頭の鉢	
図版14	33. 晩期中葉の浅鉢 34. 晩期後葉の壺	
図版15	35. 晩期中葉の小鉢 36. 晩期中葉の小壺	
図版16	37. 晩期後葉の高台坪 38. 晩期末葉の高台坪	
図版17	39. 晩期末葉の壺 40. 弥生初頭の小鉢	
図版18	41. 石錐 42. アスファルト附着の石器	
図版19	43. 石べらと石匕 44. 土錐と石錐 45. 石錐	
図版20	46. 磨製石斧 47. 凹石 48. 凹盤状の土製品と石製品	
図版21	49. 土偶 50. 装身具	

## はしがき

神矢田遺跡の第1、2次発掘調査の結果は、その概況を昭和45年3月に報告している。それによって神矢田の性格ははば明らかにされたといえる。その後、第3～5次まで発掘調査を継続し、新たな資料を加えることができた。そこでここに継続調査による結果の報告を中心にしてながら、前報告書において不完全もしくは誤記した点を補正し、考察を加えて前報告書と多少重複する点もあるが、神矢田遺跡発掘調査の総括的な報告としたい。

遊佐町の周辺では石鎚を神矢石（かみやいし）とよんでいる。同町中藤崎の西に庄内砂丘を横断する道路があり、神矢道とよばれている。この道附近から佐藤羅麻翁が植林の際に発見したという石鎚・石槍・石匕・石棒・磨製石斧などが、今でも同家に伝えられている。時は「延享（1744～48）の昔」とあり、所は「西浜砂山」「神矢根道」とある。特に石鎚の数はおびただしく、時期が下ってから明治天皇へ献上している。その際銅箱10個と献上の石鎚452点が撮影されて残っている。これらの中にアメリカ型石鎚があり注目される。飽海郡内の庄内砂丘地で今のところ石鎚出土でもっとも注意される遺跡で、「日本三代実録」に見る記録はこの神矢道附近である可能性が強い。

神矢田もまた石鎚を多出する水田という意味の地名である。調査団の村上孝之助が所蔵する石棒には「正徳元年（1711）北目堰より採集」と記されている。北目堰は神矢田遺跡を南北に2分して西流する灌漑用水路である。開田とともに用水路が切り通されたのは江戸時代の中頃といわれ、この石棒がその時期を明示している。その時多くの石鎚が出土して神矢田と名づけられたことであろう。伴出した遺物とともに有孔石斧（樋口1931）に今は散逸している。昭和6年、樋口清之氏が「有孔石斧の一例」（上図）という報告を「史前学雑誌」に掲載している。その出土地は“羽後国飽海郡高瀬村富山字神矢田”となっており、所蔵者は東田川郡東栄村添川の鈴木盾三氏である。頭部を失したハマグリ形両刃の磨製石斧で、中央に約1.5cmの円錐孔が貫通している。この出土例は弥生文化の発達に結びつけて考えることもできる。昭和10年に中谷治宇二郎氏は『日本先史学序史』を著わし、神矢田の遺跡名が記されているが、樋口氏の出土例によるのであろうか。



その後、遺跡は深く地中に忘れられてきた。ところが昭和45年2月畠地区圃場整備事業によって遺跡の一部が破壊され、無数の遺物とともに再び地上に姿を現わした。この情報が村上孝之助、致道博物館の酒井忠一氏、山形大学の柏倉亮吉名誉教授と筆者に伝えられ、同年4月3日、6日、19日と現地調査が実施された。その結果遺跡の重要性と発掘調査の必要性が確認され、以後5次にわたる調査が行われている。したがって緊急調査といえるが、発掘の主体となつた遊佐町教育委員会の埋蔵文化財に対する高い意識と、地主曾原克郎氏のあたたかい好意によって、かなり満足のいく調査ができた。遺跡は今、水田下で再び眠りにつこうとしている。

## 第1章 遺 跡

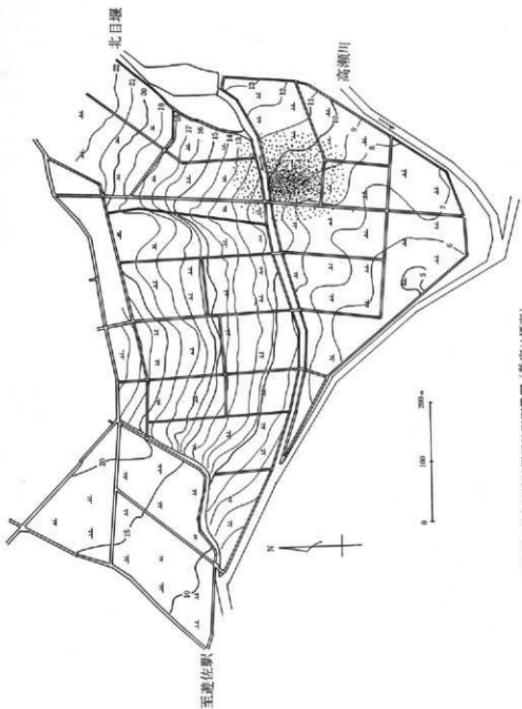
神矢田遺跡は山形県鶴岡市遊佐町大字北目字神矢田にあり、調査地点は1番地と1番地の1ある(今回の調査期間中に正式地番を調べたところ前報告の記載は誤りであった)。

遊佐町は山形県の西北端にあり、出羽富士と呼称される秀峰島海山(2229.9m)の南西山麓



第1図 神矢田遺跡と周辺の遺跡(×印・神矢田遺跡、▲印・神矢道遺跡)

—吹浦(五万分の一)図幅の部分—



第2図 神矢田遺跡附近地勢測量図(表字1/4倍)

部と庄内平野・庄内砂丘の北端にひらけた町である。この町には93ヶ所の遺跡が確認されているが、先史時代の遺跡は山麓部に集中している。すでに広く紹介され注目された遺跡も多い。古代における「石垣雨路」の西浜はその位置が未明である。また杉久保形ナイフを出土した臂曲遺跡、繩文時代早期の円形住居跡の発見された金俣遺跡、前期の円筒と大木文化層の接触地点とされた吹浦遺跡、晚期の追光土偶を出土した杉沢遺跡、青銅刀を出土した三崎山遺跡などはいずれも神矢田遺跡から8km以内の島海山麓にある。

さて神矢田遺跡は島海山の西南山麓部が特に庄内平野に接しようとする地点にあり、標高は9mを数える。西に松の木もありやかな庄内砂丘を越えて日本海が浮び、東側に島海の靈峰が聳え、南に鞍倉庄内平野が眺望される。島海に瀬を発した高瀬川は遺跡を迂回するかのようにその東側を南流し、方向を転じて南側を西流する。この清流は古くより鮎の上る川として知られ、現在でも孵化施設と漁獲高は日本第一を誇っている。遺跡を南北に断ち切る北目堰は高瀬川の水を求めて、遺跡のやや北東で落差を一度貯めこんで堆積に使用している。遺跡の北方約400mの畠部落内には清らかな湧水が絶えることがない。日本海の汀綫までは5.3kmである。附近の遺跡は第1図に示した通りである。

遺跡の基盤となる地質は安山岩質火成岩である。島海山は江戸時代まで爆発を起した火山であり、千年単位ではかなりの地形的な変動を想定できるが、瀬野ではここに河川による運搬、堆積の活動が激しい。冲積層はこうした地層の上に比較的薄く堆積している。

現在遺跡は水田として利用されている。南向きのなだらかな斜面に位置する。第2図に示した地形測量図はすでに圃場整備事業が進行し田地形面が大きく変化していたため、圃場整備計画のために計測された旧水田面の標高をもとに作成したものである。農道は新規のものを記入した。遺物の散布している状態をドット分布で示したが、その広がりは約200mの円形を呈する。高瀬川の右岸にあたり遺跡からの距離は200mに満たない。遺跡の北端と南端の北高は5mで傾斜面を形成しているが、高い地点に古い遺物が低い地点に新しい遺物が見られた。つまり北目堰の縁辺には繩文時代中期～後期前半の土器片が多く、遺跡の南半には後期後半～晚期の土器片が多かった。

## 第2章 第1次・第2次発掘調査の概要

昭和45年度に行なわれた第1次・第2次発掘調査の面積は延べ224.5m<sup>2</sup>に及んでいる。調査地は圃場整備事業から破壊を免れた地点、つまりブルトナーが土を削った所を避けて、なるべく盛土を運んだ所を選んだ。多少の試掘によって北目堰の南部には南北の方向に長い5本のドレンチを設定した。その調査の結果前報告のようなことが明らかになつたのであるが、ここにその概要を記しておきたい。

遺跡の地層は第3・4トレンチの西壁の計測によって、下記のような基本的な層序を確認することができた。

第1層	暗灰色腐植土層	(15~40cm)
第2層	茶褐色砂質土層	(7~35cm)
第3層	黒色腐植土層	(0~40cm)
第4層	黄色粘土層	

前報告書では第4層を第3層Aと仮称しておいたが、全く異質の層位があるので改めておきたい。遺物は第1~3層に包含されていた。第4層には原則として包含されていないが、直上面に突き刺したような状態で他には見見されている。遺構は主として第4層の上面に形成されていたものが明瞭に確められた。第1層は耕土である。第2層は大小の河原石を含んでおり、高瀬川の運搬、堆積によるものと考えられる。また第1層から第3層へ漸移的な状態をもなしていた。したがって第1、2層の出土遺物は自然と人による擾乱を受けているものである。遺物の第一次的な包含は第3層にあるものと考えられた。しかしこの地層もレンズ状に錯綜しており、内部や下部に河原石が多量に認められたり、新旧の遺物が上下に逆転していたりするので、やはり河川によって擾乱されていることが知られた。第4層は火山灰の堆積によって形成された地層である。基盤となっている島海山の火山灰層物の上部をなしているものと考えられる。なおこれらの地層は第3次以後の調査によってさらに細分された。また第1層の上にブルトナーの運んだ盛土が0~50cm程度堆積して現地表面を形成したいた。

発見された遺構は炉跡1ヶ所、住居跡2ヶ所、石組1ヶ所である。それらをそれぞれ発見順に名づけていった。第1号炉跡は第1トレンチ中央の柱状区の裏中に出土したものである。3層の上部に作られていていたもので、横円形を呈していた。北東をさす長軸は102cm、南西端の

幅は92cm、9~22cmの大小13個の河原石によって囲まれていたものである。木炭片がわずかに検出されたが、石の焼け方はそれほどひどくなく、短期間の使用と考えられた。この炉跡をめぐる住居跡を発見することはできなかった。後期末葉の時期と思われた。第1号住居跡は第1号炉跡を得た第1トレンチ中央拡張区の、第3層の下部から発見したものである。直径6~7mの円形に17本の柱穴がやや不規則に配列されていた。柱穴は直径14~42cmで深さは10~22cmであった。第4層に掘り下げて作られたもので、8本が根固め石を備えていた。中央部に木炭片が散乱して直徑94cmの円形に河原石で簡単に囲んだ炉跡があった。この炉跡の1.2m北西に長径0.5m、短径40cmの楕円形の石壠が設置されていた。扁平な自然石を利用しているが上面の凹みは直徑16cmの円形を呈するものである。後期末葉の平地式住居である。第2号住居跡は後述する。第1号石組は第4、5トレンチの北部、第3層の下部に出土したものである。長径が1.45m、短径が0.55mの楕円形をしたるもので、30cm前後の17個の自然石で囲み、石は第4層にしっかりと埋め込まれていた。この石組は第2号住居跡の南西部に接近して発見されたものであるが、住居跡に隣接する構造とは考えられない。石組の東側から土偶の胸郭が出土している。石組内部より特別な出土品はなかった。後期前半の石組であり、理柵遺構かと思われる。

出土した遺物は第3章、第4章でも触れるので前報書面に紹介した状況を簡単に要約しておきたい。土器は完形品は3点であるが、破片は約15,000点に達している。完形品は小形のものばかりであり、河川の氾濫を受けたため復元可能な土器が少なかったためである。これらは繩文時代後期~晚期にわたるもので、わずかに中期のものも含まれていた。精製土器と粗製土器に大別され、その数量比は1:3であった。さらに土器の形態的特徴によって分類した結果精製土器は21類、粗製土器は14類に類別された。それらを既知の土器型式を参考にして群別すると16群となった。第1群は大木10式、第2~10群は袖注溝、宮戸I式、大湯溝、宮戸II式、宮戸III式、西ノ浜式、宮戸IV式、薄原良治氏の第3類、宮戸V式、第11~16群は大洞B式からA式にそれぞれ比定することができた。繩文時代中期末葉より後期、晚期にわたるほとんどの土器型式が調査されるような状態で発見されたことになる。土器のほかに572点の石器類が出土した。162点の石鉋をはじめとして石錐、石匕、石べら、打製石斧、不定形石器、磨製石斧、石錐、石刃、石棒、四石、円盤状石製品、浮子石、磨石、石皿などである。石錐は4つ、石匕は3つに分類することができた。さらには7点の土偶と柱状耳飾、スタンプ彫刻品、有孔円柱形土器品、玉と垂飾品、土鍬や円盤状土器品も出土している。自然遺物としては骨片、植物の種子、朱の原料らしい植物などが見見された。以上の出土品はいずれも上記の土器型式によって示される時期にあると思われるが、土偶などの特殊な例を除いて、伴出土器の決定ができないので詳細な検討が不可能であった。

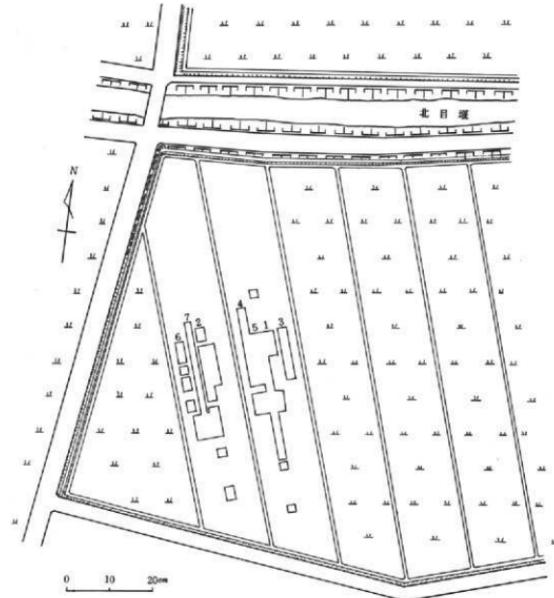
第1次・第2次調査によっておおよそ以上のような成果を得たのであったが、いろんな問題を提起したまま昭和46年度の調査を終つこととなつた訳である。

## 第3章 第3次・第4次・第5次発掘調査

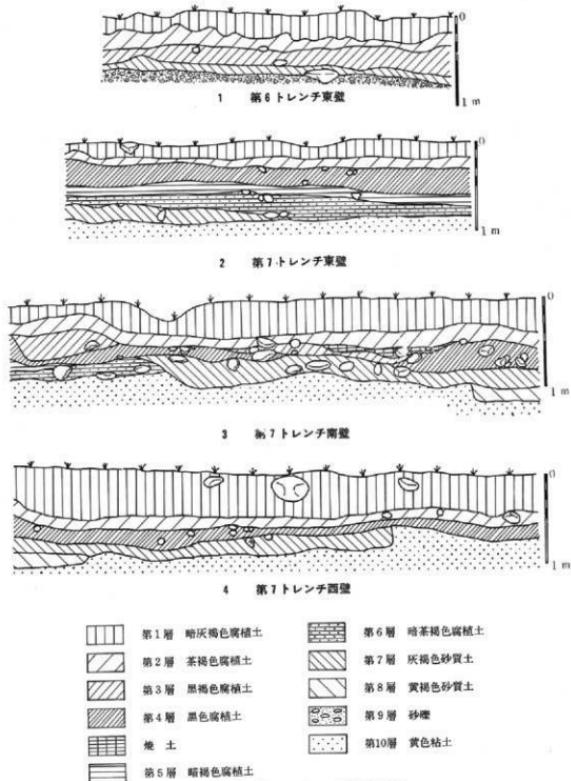
### 第1節 発掘調査の経過と層序

第3次から第4次・第5次にわたる発掘調査はそれぞれの調査が別個の特別な目的をもって実施された訳ではない。以前の2次にわたる調査で不備であったこと、問題として残されたこととさらに充実した資料を得るために継続して行なわれたのである。すなわち第2号住居跡を完掘して記録すること、より豊富な遺物を層位的な分析をすまながら検討してみること、土器編年研究上の有力な資料を得ると同時に土器以外の遺物によって縄年づけてみること、せめて休耕してくれた限られた範囲内ではあるがその部分の全容に迫ってみることなどが大きな目標事項であった。しかしながら完全に達成されたとはいえない。むしろ目標達成率は5割程度といえようか。発掘期間中に雨天の多かったこともあるが、周辺の水田耕作が開始されているために湧水が激しく調査は困難を極めた。

昭和46年度の調査では第3次に第6トレンチ、第4次に第7トレンチとその南部拡張区が設けられた。この新たに設けられ調査された面積は81.9m<sup>2</sup>になるので、神矢田遺跡の調査面積は合計で306.4m<sup>2</sup>ということになる。まず第3次調査は第2号住居跡の全貌を明らかにし、第2号トレンチ拡張部を完掘することになった。そこで第2号住居跡の西半分を完掘するために第1トレンチ北部の西側を東北に2m、南北に5m拡張したところ、その全貌が姿を見せ記録することができた。一方第2トレンチは以前の調査で遺物の包含状態が非常に良好であったのだが、出水がひどく水が抜け切らず結果深さ3cm程度剥削して終った。遺構を破壊する心配から第2トレンチが調査できないので設けたのが第6トレンチである。第6トレンチは第2トレンチと平行してその南端3mの地点に設定したのである。南北24m、東西1.5mのトレンチで南北より2mづつ区分して1~12区とした。このうち1、3、4、5、6、7、8、10区が掘った部分である。第3次調査では7、8区を除いた区を調査したのであるが、遺物包含層が思ったより深く、基盤の黄色粘土層は1mを越える深さをもっていた。6区の北壁は柱穴の断面が1本出土した。直徑5cm、深さ25cm程で第3層中から黄色粘土層へ達していた。第4次調査では第7トレンチを設定した。これは第2トレンチと第6トレンチの間に平行して設けたものである。南北24m、東西1.5mで北より2mづつ区切して1~12区とした。このトレンチは1、2区を除いてはすべて掘っているが、時間的に包含層を完全に掘り上げることはできなかつた。3、4、5区からは大小の河原石が塊状に配石された一部であるかのように出土したので、東西へ幅6mで1m拡張している。12区の南端からは地表からしい焼土が出土したので、その部分を中心にして南北6m、東西6mの拡張区を設定して調査が進められた。完形品を含めた遺物



第3図 神矢田遺跡発掘地点測量図（数字はトレンチ名）



第4図 第6、7トレンチ地層断面図

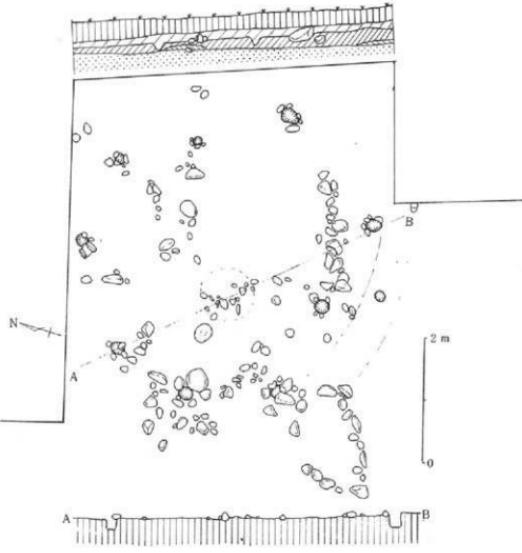
の最も多かったのがこの試験区である。しかし湧水最も多い所で真夏の炎天下でもトレント内に排水溝や、水溜め穴を作らねばならず排水ポンプが常時鳴り続けた。調査は常に水と泥との闘いであった。そのため掘り下げるなかで土色の変化が把握できなかつた。第6トレンチの7、8区は第2層より砂礫層にいたるまでの約40cmを5cmぐらいづつ7回に分けて、一枚づつ剥ぎ取るように調査を試みた。結果は思ったより良好とはいえない。下部になるほど晩期の古い時期の土器片が多くなっていく傾向がうかがわれたが、後期の土器は少なく、他の遺物の時期を断言できるような出土状態とはいえなかつた。第5次調査では第7トレンチ南部拡張区が基盤まで達してしまつたので、包含層を全部調査するために計画したものである。だがついにこの悪天候で以前にも増して水のため調査は難航した。その結果崩壊、柱穴などを発見し、最下包含層に加曾利B II式や振之内式などがあることを確認して発掘調査を終了した。

第2次調査まで発掘点東部の地層を明らかにしておいた。今回西部の第6、7トレンチを調査したところ、その層序が基本的にはちがっていない。しかし西南部へ北東部から傾斜するうちで低い部分にあたることもある。若干相違を見せてている。また以前より包含層がよく観察すると色と土質に変化があり、細分することが可能であった。第4図に示したのは第6トレンチ7、8区東壁、第7トレンチ南部拡張区の東、南、西壁の層序である。このほか第5団石組構造出土地の東、南壁、第6図第7トレンチ炉跡断面図、第7団第2号住居跡の東壁なども図示しておいた。いずれもブルトーザーによる盛土は削除しておいたが、第7トレンチの8区で46cm、12区で53cm堆積していた。層位の名称はその下部にある旧地面表面から呼称していくものである。第1層は暗灰褐色腐植土層で9~37cmであり、これは耕土である。第2層は茶褐色腐植土層で5~23cmである。第1層と第3あるいは4層との漸移層であり、オレンジ色の塊を含んだ薄い直線が横に入っている。第3層は黒褐色腐植土層で0~44cmである。第4層は黒褐色腐植土層で7~32cmである。第5層は暗褐色腐植土層で0~21cmである。第6層は暗茶褐色腐植土層で0~29cmである。第7層は灰褐色砂質土層で0~33cmである。第8層は黄褐色砂質土層で0~17cmである。第9層は砂礫層であり、第10層は黄色粘土層である。第9層と第10層の厚さは確認できなかつた。以上のように主として第7トレンチを標準として10層に区分することができたが、複雑に入り組んで堆積しており、他の地点とは第7トレンチ拡張区が様相を異にしている。第7トレンチ内でも東側と西側では錯綜した状態になり、遺跡の複雑さを示している。東部が割合単純な層序であるとの対象的であった。遺物は第1~9層に含まれており、かなりの出土数を示しているが、第1、2層は人為的な擾乱が考えられる。第3~9層は河川による擾乱が認められた。第7トレンチ南部拡張区は結果として複雑な層位関係をとらえることができたのだが、調査中は出土のため泥の中に遺物をさがすような状態で土色変化を判断できず、地層別に遺物を整理検討することができなかつた。今回調査した地区は上部擾乱層の中に後期の土器があり、下部の包含層は晩期の土器が多かつた。これは遺跡の北東部に古い時期、西南部は新しい時期の居住地であったことを示している。ただ第7トレンチでも第8層以下は後期の土器が出土している。

## 第2節 遺構

新たに発見された遺構は住居跡1ヶ所、炉跡1ヶ所、石組1ヶ所である。これらをそれぞれ第3号住居跡、第2号炉跡、第2号石組と呼ぶ。なお第2号住居跡は西半分が前回未発掘であったが、第3次調査で完全な姿を見せたので再び説明を加えておきたい。

**第2号住居跡(第5図)** 第2号住居跡は第1、5トレンチ北部から出土しはじめ、東側を10m<sup>2</sup>拡張した結果全容が確められたものである。10本の柱穴が直径4.6mの円形に配置されている。この柱穴は9本が根固め石を備えている。柱穴の直径は18~32cmであり、深さは20~30cmである。第3層から直下の第10層とした黄色粘土層を掘りくぼめて作っている。柱穴の間隔は1.20~2.15mである。柱穴列の南側に幅60cm程のベルト状に白色に近い粘土が発見された。



第5図 第2号住居跡実測図(右下第1号石組)

わざかに薄く検出されたのであるが、周壁の一隅かと思われる。この周壁は柱穴列のすぐ外側に形成されたもので、この周壁内を屋内と考えれば住居跡の内部は直径 6.2m の円形をしたものと考えられる。屋内の中央部や西寄りに炉が作られている。真赤に焼けた土が直径 90cm 程の円形に広がっており、その中に焼けた河原石がいくつかころがっている地炉床の形式である。この炉跡の北西に石皿がある。長軸が 28.2cm、短軸が 22.7cm の扁平な楕円形の安山岩を原料として、上面に直径 15cm、深さ 1.8cm の凹みが作られているものである。この住居跡の近辺から出土した土器は圧倒的に後期が多い。しかし柱穴内から大洞 C 式平行の土器片が出土したり、床面にへばりついた最も新しい土器を考えれば晩期後半期のものと考えられる。第 2 号住居跡は晩期後半期の平面式住居跡である。

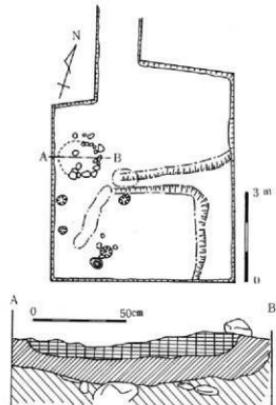
第 2 号住居跡の南西部に出土しているのが第 1 号石組である。また東壁の地盤回作成のため壁面を整理中 2 本の柱穴のようなものが発見された。第 2 層から第 3 層へ掘り下げた状態で 1.55m の間隔で直徑 17cm と 18cm である。深さは 12cm と 14cm である。柱杭とも考えられるのだが、第 1 層が落ち込んでいるものではなかった。住居跡の一部であった可能性もある。

#### 第 2 号炉跡（第 6 図） この炉跡

は第 7 トレンチ 12 区に焼土が発見されたので、拡張し掘り下げた結果出土したものである。最初発見された焼土は第 2 層の直下に出現し、それは南西部にかけてかなりの広がりを見せた。厚さも 15cm を越えていた。第 6 図はその一部を記したものである。この焼土の西側に焼石が半円状に配置されて発見された。直徑 1.15m で第 2 層と第 4 層に挟まれて設置されていたものである。同じ面で関連する遺構は発見できなかった。炉跡の南側に直線とカギ形の掘り込みが出ていている。東側の深い部分で比高が 30cm 程度で、西側になるほど浅くなり消失してしまうものであった。

炉跡のすぐ南側から、遮光器土器の頬面が出土している。比較的大きな丸玉が出土し、土器は大洞 C 式が多かった。

第 3 号住居跡（第 6 図） 第 7 トレンチ南部拡張区の南西部に発見されたものである。第 4 層の下部から 5 本

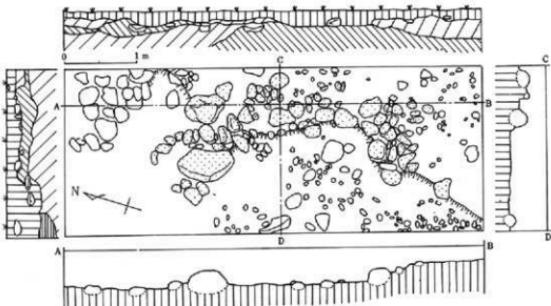


第 6 図 第 7 トレンチ南部拡張区実測図

の柱穴が不規則な配置で出土したのである。直徑 28~40cm の円形の柱穴で、深さは 30cm を越えるものもあった。この柱穴がどんな形態の住居跡をしていたのか調査できなかったのだが、第 2 号炉跡の下層から発見されたのでこれと結びつけて考えることはできない。拡張区のさらに西、南部に住居跡は広がり、発見した部分は北東部の一隅ではないかと思われる。地層断面図の西壁、南壁の第 7 層が第 10 層へ掘り込んだ様子があるが、柱穴と直接結びつく遺構であるかどうかも不明である。柱穴の中から大洞 B 式の土器が 2 片出土しているので、第 3 号住居跡は晩期初期と考えられる。

第 2 号石組（第 7 図） 第 7 トレンチの北部 3、4、5 区から出土したものである。第 1 層を掘り下げていくうちに頭から一塊もある自然石が現出し<sup>1)</sup>。その配置が環状の一部と思われたので記録に残したものである。図の点を打った石が開口部にあったもので、自然石が約 1m の幅で西側に焼石が半円状に配置してある。開口部は 2.45m であった。石の内側には落ち込みが見られ比高 20cm であった。この遺構らしいものは第 7 層の上部に形成されていたもので、石の間から出土した土器片により後期後半と思われる。西面への継続はなかったのだがこの部分だけ農道のため残されたらしい。周囲の地層にも人為的に動いた形跡があるので意図的な配石と思われるのだが、切断して調査することができなかった。性格的にも不審な点が多い。

以上が今回の調査で判明した遺構である。このほか第 6 トレンチ 7 区、第 3 層上部より、幅 47cm で比高 13cm の粘土を含んだ円弧状の帯が発見されている。これも追求できずに終った。



第 7 図 第 7 トレンチ北部第 2 号石組実測図

### 第3節 遺 器

#### 1 土 器

発掘された土器は、第1次～第2次調査のときよりも多く、完形品20点、破片約23,000点におよぶ。第1次～第2次調査のときは縄文時代中期末より晩期末にいたる各時期の土器であったが、第3次～第5次調査では、さらに弥生時代にかかると思われるものを加えている。また、第1次～第2次調査のときは、縄文後期のものと縄文晩期のものが圧倒的に多くみられ、両者とも大体同じ位の数量であったが、第3次～第5次調査では後者の比が圧倒的に多くなっている。以上の二つのことは、土器の分布傾向を示している。第1次から第5次にわたる調査で試みたトレンドは南北に長く、それを第1次～第2次調査では東北の部分を掘り、第3次～第5次では西日本に掘ってきたわけであるが、北日漬に近い方に後期の地点があり、北日漬から南下したところに晩期の地點があり、さらに南下すれば弥生の地點があるのではないかと思われる。このように地點のちがいがあることも加味して層位的に遺物を採集したが、地層の搅乱、発掘中の済水等の諸条件が悪く、分類の基準にはなり得なかった。したがって、土器の特徴に従って分類を行なった。その分類にしたがってこれらの土器の特徴を述べたい。

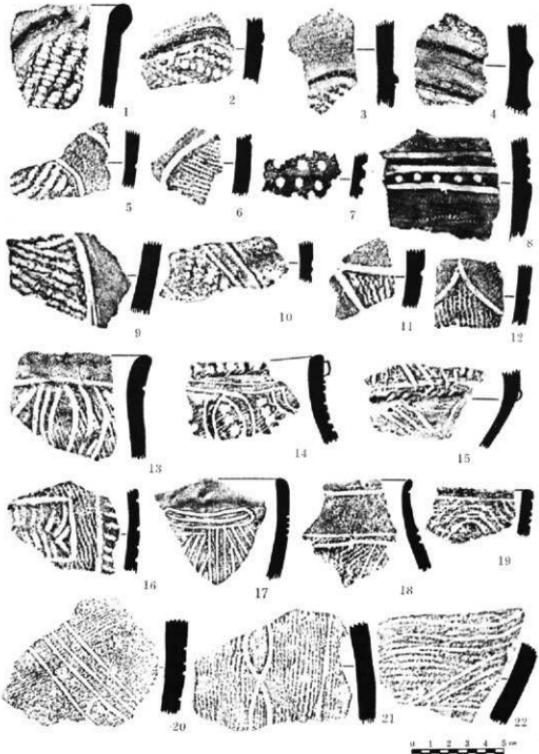
#### 精 製 土 器

##### 第1群土器（第8図1～6、9～12）

a類土器（第8図1～6、9、10） 太い大粒の縄文を用いた、厚手の磨消縄文土器である。器形は、良好な資料がなく明らかでない。口縁が直上もしくは外反する深鉢とみられる。器壁にさらに粘土を充てて厚くした複合口縁もある。体部上半には磨消縄文による唐縁に富んだ文様が展開される。縄文は、LRの太い原体を継ぎ、斜径、横位に回転縄文としている。磨消縄文のあり方に二種類ある。複合口縁と同じく粘土を加えて無文部分をつくったもので縦線で縄文を囲むもの（1～4）と、太い沈縁を加えたりけしたもの（5～6、9、10）がある。模様は末端で鱗状の形態をとるものが多い。割と質の良い土器である。

b類土器（第8図11、12） 資料が少なく、全体が明らかでないが、あげておく。器形は、口縁がわずかに外反、外側する長削の深鉢であるとみられる。口縁に後縁による鱗状突起が耳のように施されるものもある。底位に回転施文された捺糸文を地文とする磨消縄文を有する。用いられた沈縁は大きく、大きく曲線を描いて施される。

第2群土器 量的に極めて少なく、小破片のみで、金体を知るにあまりに希薄であるが、第1次～第2次調査の出土品も加味すれば一つのタイプとして考えられる。平縁および波状口縁の深鉢らしい。体部上半に、横縞に斜縞を走らせ、模様による“窓ワク”的な文様区画を構成しているのが特徴的である。地文は斜縄文であり、片方の“窓”だけ全面すり消すものと両方の“窓”的縄文の傾きを対にして羽伏にするものとがある。縄文は繊かなLR撚りが多い。また、あるものは横縞に縦の割込みを加えたものもある。第1群土器に比べてや



第8図 土器拓影(I) 第1群土器(1～6、9～12)、第2群土器(13～22)

や薄手である。

**第3群土器** (第8図13~22、第9図23~39、第19図 214) 地文の撚糸文に独特な曲線的な沈線文を加えて文様とする土器である。

a類土器 (第8図13、17~22、第9図23~29、第19図 214) 器形はいくつかみられる。口縁の外反する深鉢、口縁の直上する鉢、口縁がやや内凹する鉢など。口縁は平縁もしくはゆるやかに波うつ大波状口縁であり、5つの波頂をもつものもある。口縁の波頂が、3つか4つぐらいのものが多いようである。舌状に上に張り出す形のものが多い。いずれも口縁部に沈線を施してし、上部を磨消して一種の磨消鑑文をつくっている。口縁から何条かの垂線をおろしたり、8の字を重ね続けたような連續文をおろしたりして、それに同心円状の、あるいは捲巻状の沈線文を加えて文様を展開させている。214のように縦のモチーフをもちつつ展開するのである。口唇部に一条の沈線を加え、溝状にしているものもある。木の葉筋、網代状痕を有する底部もある。撚糸文は縦位、斜位に回転堆積している。

b類土器 (第8図14~16) 口縁が内脇突出で直上する。口縁部の大きい腹形土器である。

文様構成はa類と同じであるが、口唇部近くおよび胴部上半にかけて隆線を貼付し、窓ワクのような横線を構成し、その上に円錐による刺突や斜めの割みを加えている。また、文様内部に刺突文を加えたものもある (14)。さらに隆線は貼付されないが、割みを加えるなど似た施文をしているものもある (16)。

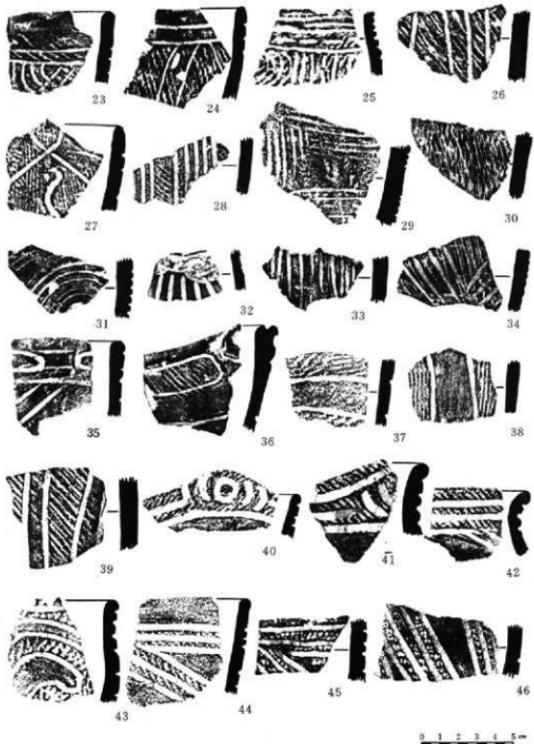
c類土器 (第9図31) 器形は不明確であるが、鉢形と思われる。器面を無文のままで、その上に目のあらい橢円状の工具で内脇などの曲線文を施している。

d類土器 (第9図32~34) 器形は深鉢形であるとみられるが、詳細不明。器面一面にヘラ状工具による沈線文を施している。ヘラ状工具というよりもむしろ細めの棒状工具を束ねたようなもので施文したものかもしれない。殆んど縦に上下にひかいたような文様となっている。

e類土器 (第9図35~39) 器形は平縁または大波状口縁の鉢とみられる。口縁は直上、やや外傾し、そのまま下降して底部へすばまる。口唇部に沈線をもつ (36) ものがある。地文は細い原体の撚糸文で、縦位、斜位に施文し、帯状の磨消鑑文がみられる。器面に沈線を施してから撚糸文を加えたのか、無文面にも撚糸文がつくなど、磨り消しは不完全である。文様は口縁周辺では横に展開し、体部では縦に展開するものが多い。沈線はa類とほぼ同じ位の大きさである。

**第4群土器** (第9図40~46、第10図47~53、55、56) 太い2~3条の沈線によってできる。磨消鑑文手法による撚糸文を有する土器を中心とする土器群である。

a類土器 (第9図40~46、第10図47~53) 器形はいくつかある。平らな口縁がやや外傾もしくは外反する深鉢および鉢、ゆるやかに波うつ大波状口縁のやや外反する器形に近い深鉢、平らな口縁が内反する鉢 (47、48)、さらに中間報告書で前述したようなトックリ形に近い壺などがみられる。壺、甕はともかく、鉢形土器は全般にバケツ形に近い「八」の字形に



第9図 土器拓影 (2) — 第3群土器 (23~39)、第4群土器 (40~46)



第10図 土器拓影 (3) 第4群土器 (47~53, 55, 56) 第5群土器 (57~67)

聞いた器形が多いようである。文様は、磨消繩文の繩文帯にさらに2~3条の沈線を加えて、あかも繩文の紐を断面に貼付たようにみえる紐縞文によって構成されている。文様帶がきちんととくられ、口縁と肩部の紐縞文の内部を、いろいろ変化する紐縞文や花芯状の同心円文で構成している。紐縞文はL字彫り単節の斜縞文を施し、それに沈線を加えて磨消繩文と、その繩文帯をさらに加えて(2~3条)繩文の様のような文様をつくる。繩文原帯はLRが多いが、RLもある。短かい原体を回転施文したものが多いようである。なお、紐縞文の結節部とか口縁の底面の下あたりの裏所要所には同心円文、渦巻文や円棒状の工具による刺突文(52, 53)を加えることが多い。器厚は削と厚手である。

b類土器 (第10図55, 56) 半粗製の壺形土器で、平らな口縁が内反し、肩部でかるく張りだす厚手の土器である。56は薄手の器形も若干異なってくるようであるが、胎土、焼成、色調が類似器に共通している。文様は器面いっぱいに連続刺突文を横走させており、太い円棒のような工具を斜めに刺突して、工具をおこすことによって盛り上がった胎土が瘤状を呈するものである。わずかなでの詳細はわからない。

5群土器 (第10図57~67、第11図69~84、第12図98~104、第19図215, 216) 肥厚した口縁が外側する鉢形土器を中心とするものである。

a類土器 (第10図57~67) いわゆる“S”字状沈原文。を有する土器である。肥厚した、平らな、あるいは大波状の口縁が外側する鉢形土器が多い。壺形土器もあるようであるが小さな破片からは何ともいえない。器形に非常に特色があり、大波状口縁の鉢などは、あたかも五弁花を呈るものとみられる。即ち、それだけ口縁が上にむかって大きく開いた器形になるのである。小さな鉢は平縁が多く、孟状になると思われるものもある。次に口縁が内側に肥厚しているのも顕著である。文様は、独特な磨消繩文であり、戴本の繩文帯を口縁部・頸部に横走させ、他は全面きれいに磨り削してしまう。沈線は太く深く施されるものが多く、口縁部から頸部にかけて「ハマチ」か「ホウタクイ」のようにめぐらる繩文帯を一定間隔を置いてS字状の沈線で切っている部分などを目立たせている。このS字状沈原文にはいろいろ種類がある。クランク形のような切った部分が直線的で離れているもの、十字形のような切った部分が直線的でくっついたもの(62)、S字を横にくっつけたように切った部分が円弧を描きながらも離れているもの(64~67)、蛇行状にS字をなして連結したものの(57)などがある。さらに細かくわけることもできるが、今のところ器形等との関連は明確になっていない。文様はL字彫りの原体を短くしたような施文法が多く、横位に回転施文している。底部は、第4群までのものとちがい、きれいにみがかれたものがあるなど、ていねいに手を加えたものが多い。底部のスジが外へはりだし気味のものが多いようである。口縁突出がつくものも多いようであるが、良好なものがないので詳細はわからない。胎土、焼成のとても良い土器である。

b類土器 (第10図68~84) この土器は第1次~第2次調査のときは少量であったので、第4群土器に関連が強いと考えられたが、以後の調査でa類土器とともにかなり出土した



第11図 土器拓影(4) — 第5群土器(88~84)



第12図 土器拓影(5) — 第5群土器(98~104)、第6群土器(85~97)

で特徴がはっきりしてきたものである。器形は鉢形土器である。平縁もあるが、大波状口縁が多い。口縁には口縁突起がつき、その形状も様々である。半割した小突起(68)、動物の耳のような大突起(69)、テーブルのような大突起(70)の他に、円柱のようにそそりたつ大突起や一見して土偶のような感じのする得体の知れない形状のものまである。口縁部は内側に肥厚し、極端なもの(73)までみられる。口縁は全体として大きく上に開くが、口軒に近い部分がなつので外脛した形態をしめしている。頸部でかるくしまり、胴部でふくらみ下垂する器形とみられる。文様は底面に特に特徴的な文様を展開させている。口縁部および胴部に縦文帯を走らせ、その間に非常に曲線に富んだ磨消織文を展開させている。磨消織文はLRの縦のきつい短い原体を太い沈線で区画した内部に転がり、その上に沈線に沿って連続刺突文を加えている。連続刺突文は殆ど工具を真上から突き刺して施文している。時には一列に施文する原則を破って三列に施文したりもする(83)。磨消織文の磨削部分はていねいにみがかれている。口唇に沈線が加えられ、一条の溝をなすものもあるが少ない。胎土、焼成とともにa類と同じく「大変良い」。

c類土器 (第19図215) 一片のみであるが器形・文様を知るのに一応十分なのであげておく。器形は、口縁が内側に肥厚する、平縁の口の開いた鉢である。外面は一面に無文研磨化され、一條の太い沈線が口縁に施されている。文様の主体は内側にあり、口唇を内側に刻み、その下に後縁や沈線に連続刺突文を施したり、LRの半周斜織文を施したりしている。器内面に文様を施すに大きな特色をもっている。

d類土器 (第12図98~104、第19図216) これもこの第5群に加えるべきか否か迷った土器であるが、器質や一部の文様から一応この仲間に加えたものである。量的にもあまり多くない。やや内側に肥厚気味の平らな口縁があるが外脣で大きく開く鉢形土器である。やや薄手である。文様は、口縁に磨消織文手法による幅の広い織文帯をめぐらし、その上に太い沈線で、横位・斜位の平行沈線を加えて格子状となしたものである。216のよう格子状をなさないものもある。文様はLRの短い原体（しかも握りのきつい）横位、ときには斜位に回転施文している。胎土・焼成良く、かたくひきしまった土器である。

**第6群土器** (第12図85~97、第13図105~107) 羽状織文を有する土器を中心とする一群である。

a群土器 (第2図85~89、91~93、95) 器形は第5群土器と共通する。口縁が内側に肥厚する、大波状口縁が花弁のように上に開く鉢である。蓋や往口らしい破片もあるが、器形を確認するには不十分である。文様は口部を丸める連続刺目文と、その間に展開される非常に曲線に富んだ磨消織文である。磨消織文は太い沈線で区画された内部に織文を残すように行なわれるが、その織文は殆んどLRの半周の短い、握りのきつい原体を横位・横位に回転施文させて羽状となした羽状織文である。連続刺目文は口縁に施された場合をのぞいて單独で文様とはならず、磨消織文の磨削部分と織文部分の境線のように施文されている。刺目文法は、沈線を施した際に用いたヘラ状工具を盤面に直角にあてて削んでいるものであ

る。胎土、焼成とともに第5群土器と同じく「大変良好な、かたくひきしまった土器である」。

b類土器 (第12図90) 一見して粗製土器とまちがいやすい土器であるが、胎土、焼成もよく、深鉢形にはならない。器形は、肥厚した口縁が大きく開く鉢形である。文様は斜縞文に一束の沈線を加えたもの(90)、磨消の帶織文がある。後者の場合は口脣近くに一束の沈縞を施し、沈縞の上下いずれか一方を磨り消して、帶織文を横に走らせるだけである。沈縞の上を磨り消した場合は頭部近くにもう一条の沈縞を加えて幅の広い帶織文とし、沈縞の下を磨り消した場合は下の方にもう一本の帶織文を施すこともある。織文はLRの原体（短かいもの）を横位・斜位に回転施文している。

c類土器 (第12図96、97、第13図105~107) このタイプの土器はこの第6群の中に加えるべきかどうか迷った土器であるが、器質の上から（胎土・焼成）この第6群に一応加えたものである。資料が少ないのである。器形は口縁の内側に肥厚する、口が開き頸部でかるくしまり、胴部でふくらむ深鉢形であろう。文様は口縁に磨消織文であるが、織文部がまたかもテープをまきつけたののように、同じ幅の織文の帯が曲線的に展開される。織文はやはり短かいLRの原体を用い、横位・斜位に回転施文している。胎土・焼成とともに大変良好で、かなくひきしまったいい土器である。

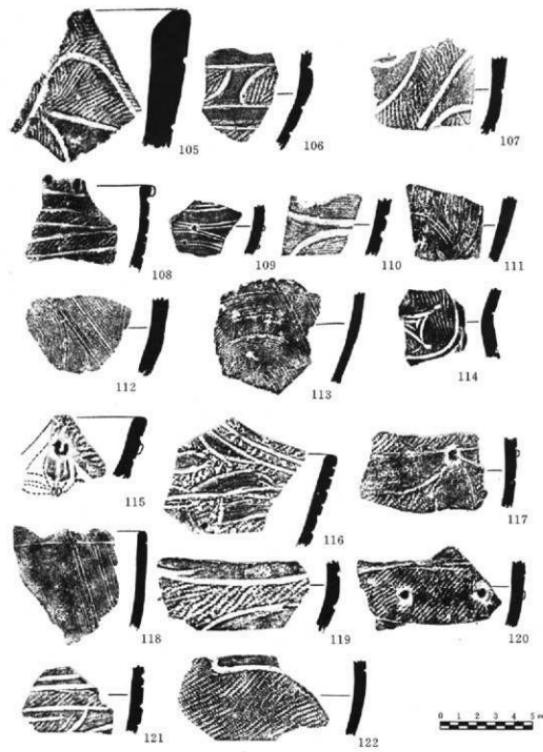
**第7群土器** (第13図108~114) いわゆる入組磨消織文のうち曲線に富んだ文様をもつ土器を中心とする一群である。

a類土器 (第13図108、114) 器形は、内側に肥厚する波状口縁が外脣して上に開き、頸部で難くしまり、胴部でふくらむ深鉢形であろう。縁に半削した張瘤小突起が口縁につくとみられる(108)。文様は磨消織文による入組文であるが、第6群にみられたテープをまきつけたような帶織文(108)と極めて曲線に富むコの字形にもどる入組文の二種類ある。破片も少なく、保存状態のよくなじみのばかりなので、不明な点が多い。織文はやはり短かい単純の原体を横位・斜位に施文している。原体はかなり細くきつく擦られたるものであり、細かな織文が施されている。

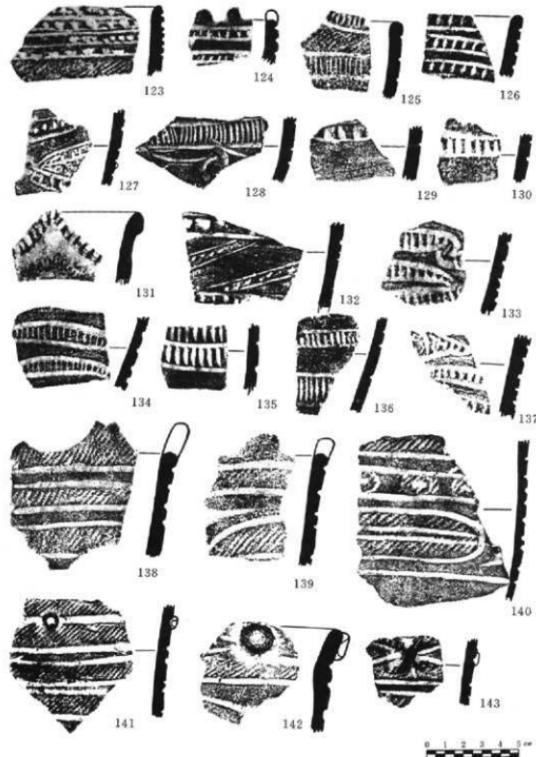
b類土器 (第13図109) 器形は注口もしくは蓋であろう。全面研磨無文化された器面に細い半纏竹管状の工具で入組文を描いた文様に小さな張瘤小突起を貼付している。この文様は皮膚をつめのようなものでひっかいたときははれ上がってくる、「みみずつ張れ。」のような感じのするものである。小さな彫曲の大きい器形の土器に多く用いられるようである。量的に不少。薄手で器質が良い。所持色を呈する。

c類土器 (第13図110) 器形は、資料が少なくはっきりしたことはいえないが、a類土器と同じであろう。文様は、磨消織文手法による「すりけし刷毛目文」であり、全体として入組文を構成するとみられる。薄手で器質も良い。

d類土器 (第3図111~113) 器形は資料が少なく、不明であるが、おそらく平らな口縁が外脣気味に直し、全体が半削削状の器形になる深鉢と思われる。文様は刷毛目文であるが、111のように入組文を構成するものがある。ここにあげた三片は胎土・焼成の上でも共



第13図 土器拓影(6) — 第8群土器 (105~107)、第7群土器 (108~114)、第8群土器 (115~122)



第14図 土器拓影(7) — 第9群土器 (124, 126~130, 132)、第10群土器 (133~143)

通している。器質はa類・b類はどうではないが、比較的良いほうである。

#### 第8群土器 (第13図115~122) いわゆる弧線連続文を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第13図 115~117, 118) 器形は大波状口縁が上に開いた、頸部で軽くしまる胴張りの深鉢である。文様は磨消繩文手法による「弧線連続文」である。繩文はL.Rの短かな原体を横位・斜位に回転施文したもので、細かい繩文である。唇沿部分が弧線の外にくるものと、弧線の内にくるものと両方ある。沈線は比較的細いが、太いものと細いものの両方ある。弧線と弧線の結合部などに張縮小突起を貼付したものが多い。器質は普通である。

b類土器 (第13図 120~122) 器形はa類と同じような器形である。文様は磨消繩文による入組文であり、繩文部分に張縮小突起を貼付するものが多い。繩文は短かく細かいL.Rの原体を横位に回転施文している。器質はやはり普通である。

#### 第9群土器 (第14図 124~132) いわゆる割目文を有する土器群である。

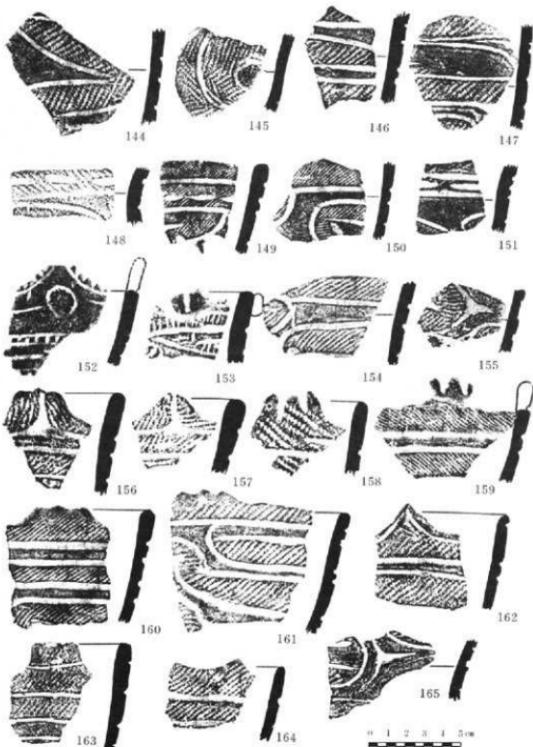
a類土器 (第14図 124, 126, 129, 130) 器形は平縁か、平縁に張縮小突起、とした小波状口縁の、わずかに外骨気味に直上する、半削形の深鉢である。文様は口縁部に施された平行沈線の間に連続割目文を加えたものである。連続割目文は比較的間隔をおいて刻突して施したものである。

b類土器 (第14図 125, 127, 128, 131, 132) 器形はゆるやかに波をうつ大波状口縁の頸部でしまる胴張りの深鉢とみられる。文様は、磨消繩文手法による入組割目文であり、二線間にa類と同様に刻突風の連続割目文が加えられる。128のように弧線連続文とも入組文とも区別がつけられないような文様を伴なうものが多い。127のように入組の結節に張縮小突起を加えるものもある。

#### 第10群土器 (第14図 133~143、第15図 144~157、第19図 218) 磨消繩文による入組文土器のうち、三叉状陰刻や張縮小突起を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第14図 133~137、第15図 152、153) 第9群土器と大差ないような特色をもつ土器である。器形は、大波状口縁・平縁の外側もししくはやや外反気味に口の開く、頸部で軽くしまる胴張りの深鉢である。磨消繩文手法の入組文内部に連続割目文を施している。割目文は第9群のものとちがい、刻突されたものではなく刻んだもの、刷毛目を加えたようなものである。入組文はかなり扁平化している。153のように大形の半削された張縮小突起を施したものもある。152のように外側する口縁や刻突風の割目文をもつ第9群の要素を強くもちながらも新らしく、円文とそれに続く沈線のような要素を加えたものもある。

b類土器 (第14図 138~143、第15図 144~151, 154~157、第19図 218) 器形は、外反もしく外傾する口縁が上にむかってやや開く、頸部で軽くしまり胴張りとなる深鉢である。口縁は、わずかに肥厚し、張縮小突起を口縁突起としてたくさん配置している。口縁小突起は大小交互に配置している。どちらかといえば上に尖がっているので、疣状といってよい。大きいほうの突起は二つに分離される。口縁から頸部にかけて繩文帯によって区画された文



第15図 土器拓影 (8) — 第10群土器 (144~157)、第11群土器 (158~165)

横帯があり、崩消繩文による入組文が施されている。繩文は殆んどL R捺り單館の原体を横位に回転施文したものである。口縁突起の下部（156～157）や入組文の結節部などに三叉状の陰刻を施すように加えたものや、入組文の結節部など比較的大きな張瘤小突起を貼付したものが多い。張瘤大突起は綫長のもの（143）、丸く大きいものに側突を加えてドーナツ状にしたもの（141～142）などがある。また側突を一つづつ加えたもの（140）や円文を繩文でまいて魚韻風にしたもの（145）などもみられる。さらに第8群・第9群的な要素を残しているもの（218）もみられる。頭部文様帶に点線文を施したものもある（148～151）。

**第11群土器**（第15図 158～165、第16図 166～181、第19図 217、219～223）“三叉状入組文。有する土器を中心とする一群である。

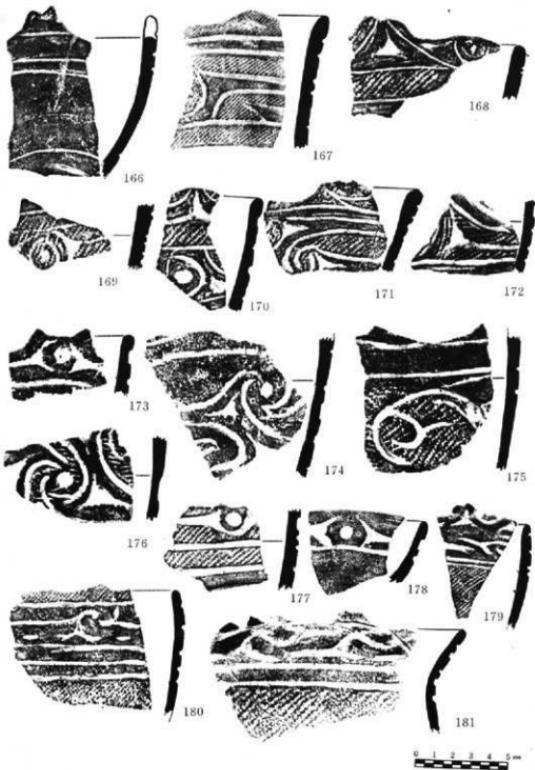
a類土器（第15図 158～165、第16図 166、第19図 217） 器形は、口縁に疣状小突起を有する口縁の聞いた、頭部で傾くしめる胸張りの深鉢である。166は台付鉢であろうか。口縁の疣状小突起は大きなものは二～三分割されるが、突起の下部に一本の沈鉢を加えるか、八の字沈線を加えるなどさればバラエティに富んでいる。口縁部には繩文帯によってはさまれた口縁部文様帶があり、扁平化された崩消繩文による入組文が施されている。入組文の結節部には三叉状陰刻もしくは三叉文を加えている。繩文はL Rの短かな原体を横位に回転施文したもののが殆どであるが、158、159のようにR Lの原体を用いたものもみられる。

b類土器（第16図 167～172、175～176、第19図 219、220） 器形は、ゆるやかに波をうつ小波状口縁の直上もしくは外傾する、半圓卵形の跡および深鉢、全体が縁を上下に圧縮したような歪曲状である。繩文帯よりなる口縁部文様帶には崩消繩文による入組文が施文されている。口縁の波頂の下部や入組文の結節部には三叉文や玉抱き三叉文が加えられている。220のよう魚韻状文を加えたものもある。繩文はL R原体に回転施文したもののが殆んどである。器質は良く、焼きしまっている。

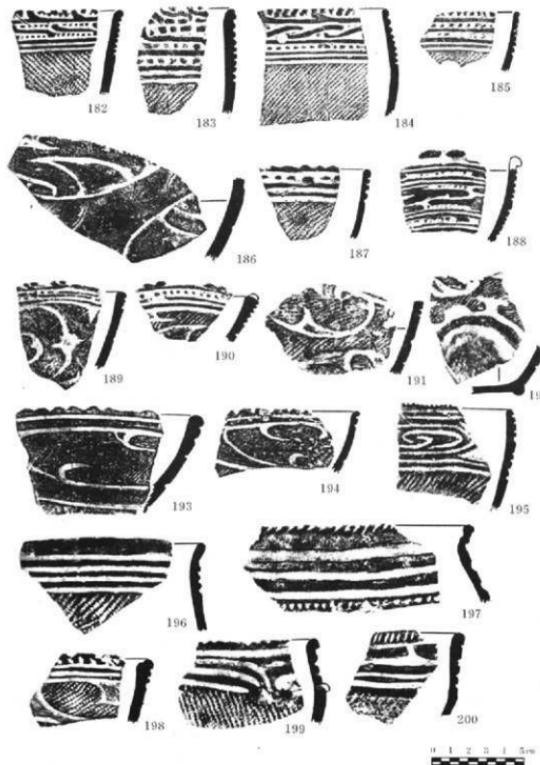
c類土器（第16図 173、178、第19図 223） 器形はほとんど平縁の台付浅鉢、もしくは浅形に近い小形鉢である。平縁であるが、一部分だけ口縁突起をつけたような、あるいは刻みを入れたような小波状である。全体が無文焼成化される。台付浅鉢には口縁部に玉抱き三叉文がつくものもある（173、178）。

d類土器（第16図 79～81） 器形は口縁が内反する半圓卵形の深鉢、鉢と口縁の外反し、頭部でしまり、やや引の張る跡がある。文様はすべて幅の狭い口縁部文様帶に集約され、三叉状入組文が施され、頭部以下の体部には横位に回転施文した崩消繩文が一面に施される。繩文は殆んどL Rの原体を用いたものであるが、羽状繩文を施すこともある。

e類土器（第19図 221、222） 本群土器は他の遺跡のことも加味すれば非常にバラエティに富んだ文様をもっているが本遺跡では、連續文を有する鉢（221）や小波状口縁の深鉢（222）などはa類～d類に伴なってくるものである。



第16図 土器拓影 (9) - 第11群土器 (166-181)



第17図 土器拓影 Ⅲ — 第12群土器 (182~186)、第13群土器 (187~192)、  
第14群土器 (193~200)

第12群土器 (第17図 182~187、第20図 224~229) いわゆるシグ状文を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第17図 182~185、187、第20図 224、226) 口縁を割むようにしてつくられた小波状口縁の直上または内反する、やや肩が張り出す鉢形土器である。口付土器や香炉型土器 (226) もある。鉢形土器では2~3条の平行沈鉢によって区画された口縁部文様に様々なシグ状文を施している。左頸の末端のかみ合うものとくみあわないもの、右頸の末端のかみ合うものとくみあわないものの四種は最低あげられる。本類で多いのは、左頸の末端のかみ合うものと右頸の末端のかみ合わせるものである。体部には單體の斜縦文が横位に回転施される。LRのもののが多いが、RLのものもある。また羽状縦文もある。擦りがきつく堅然とした施文法である。結構のあるものもある。226のようなすかし彫りの香炉型土器もある。薄手で胎土も選ばれ、焼成も良好である。

b類土器 (第17図 186、第20図 225、228、229) 器形は様々である。ソロバン玉形に近い、肩の張った肩口土器、大形の壺、平線の平べったい壺、小波状口縁のこしき形土器などである。いずれも全体が無文化されている。注口土器や壺の場合は浮彫手法によるK字文などの文様が加えられ、研磨されている。229のこしき形土器の底部の穴が不規則であるのが目立つ。他のこしき形土器では規則的に穴をあけているのが多い。

c類土器 (第20図 227) 器形は平縁の鉢、浅鉢が多い。227は皿といってもよいほどの浅鉢である。全面にいていに斜縦文を施すのが特徴である。LRまたはRLの横位に回転施したものである。

第13群土器 (第17図 187~192、第20図 230~233、235) \* X字状文。を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第17図 187、第20図 233) 小波状口縁の平割削形の鉢である。また、口縁の内側に肩の張った鉢である。2~3条の平行沈鉢によって区画された口縁部文様には連続削目が施されるが、まだ第12群土器の要素が残っている。体部にはLRの擦りのきつい原体を横位に回転施した斜縦文がめぐらしている。

b類土器 (第17図 188~192、第20図 230~231) 口縁に二ヶ単位の小突起を配する平縁もしくは、単なる平縁の口を開いた塊形土器、壺形土器である。口縁に2条の平行沈鉢によって区画された口縁部文様には連続削目文が施される。体部文様帶には磨清縦文によるX字状文等が施文されている。また、量的にはあまり多くないが、189や231のような鉢形土器に四つ葉のクローバーのよのな\* 四つ窓文を施したものもある。縦文はLRの刻かれた原体を用いたものが多いが、施文のしかたは、才12群土器よりややくすぐれた方法になっているもの (230) もある。薄手で小さく精巧に仕上げられた土器が多い。

c類土器 (第20図 232、235) 器形は球形に近い胴部をもつ細長衆器である。口縁は大きく開く。頸部の直径は底部の直径に比してかなり小さい。文様は全面無文研磨され、朱を塗る (235) もの、縦文を施したもの (232) などがある。

**第14群土器** (第17図 193~200、第18図201~206、213、第20図234、236~241、第21図242~247) 平行沈線文。を有する土器を中心とする一群の土器である。

a類土器 (第17図 193~195、198、第20図 239、第20図 240~241) 器形は平線の口の開いた浅鉢皿、鉢である。口唇には刻みが加えられている。浅鉢形は器皿いっぽいに二条の平行沈線によって区画された文様帯があり、曲線で富んだ雲形文などの磨消繊文が施されている。織文は殆んどしRの燃りのきつい短かな原体を用いて横位、斜位に施文している。198や239のように口唇に一条の溝を走らせるものもある。口縁の内側にも施文する(239)こともある。

b類土器 (第17図 196~197、199~200、第22図 269~270) 器形は平線の外反し、頭部でしまり肩部の強る半粗製の深鉢である。口唇部に刻目を施すものが多い。口頭部に集約された文様帯は平行沈線文でおおわれている。その平行沈線文を疣状削除で区切っていく文様を施すものもある(199~200、270)。体部はLRの斜織文を横位、斜位に施文しているものが多い。

c類土器 (第20図 236~238) 器形は平らな口縁が直立し、底部へやせて続く鉢、小型浅鉢などがある。口唇には刻目を加えたり、小突起をつけて沈線を加えたりしたものが多い。また、頭部にはいくつかの平行沈線文を複数し、強縮小突起を配置したものがある(236)。体部にはLRの斜織文を施文しているが、織文法は必ずしも一定していない。

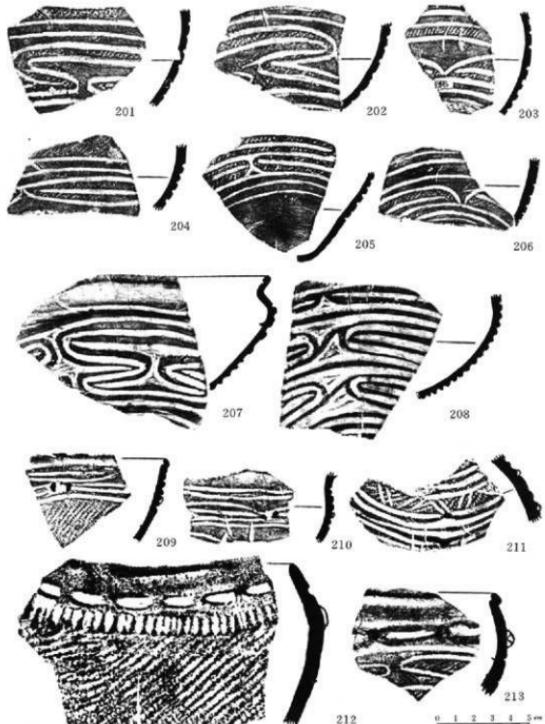
d類土器 (第20図 240~241、第21図 247) 器形は平行の開いた口縁を有する球形の広口壺である。文様は殆んど細かな單節の斜織文で、LRの原体を横位、斜位に回転したものが多い。頭部や底部近くに一条の沈線を加えたものもある(247)。

e類土器 (第18図 201~206、第21図 242~246) 器形はいくつかある。小波状口縁の台付浅鉢(243)、平線の浅鉢(244)、口縁把手をもつ小波状口縁の鉢(242)や頭の長い扁平球状の壺(245)などである。文様は口頭部より胴部上半にかけての主文様帯には工字文などの磨消繊文を施している。織文は細かな短かい原体を用い、殆んどLRである。底部は、平底、あげ底、台付があるが、中には底部を内から刺突して底部外面をつきだした脚付もある(205、244)。薄手で、よく粘土を選び、焼きも聞く、きれいに研磨されている。

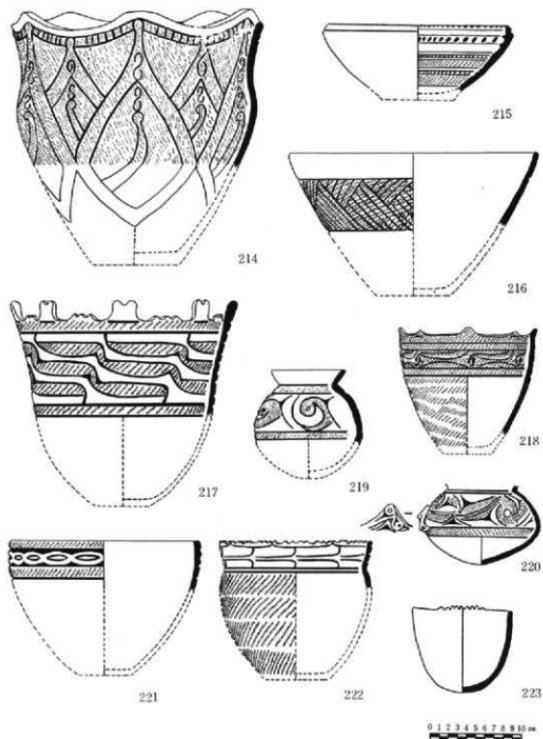
f類土器 (第18図 213) 器形は、平らな口縁の内側する鉢または浅鉢形の土器であろうか一片のみで不明な点がある。文様は肩部に貼付された連鎖状文、胴部に横に長い曲線的な磨消繊文がみられる。織文はLRで、沈線は太い。あまり器質が良好とはいえない土器である。

**第15群土器** (第18図 207、208、第21図 248、249、251、252、254) \*工字文。を有する土器を中心とする一群である。

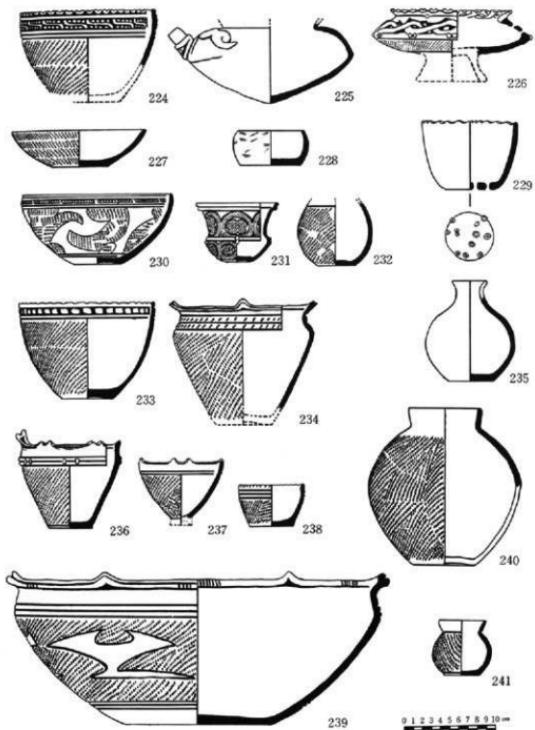
g類土器 (第18図 207、208、第21図 249) 器形は、口縁の外反し頭部でしまり肩部で張り出す鉢、壺などである。文様は、体部を中心に平行沈線で区画された文様帯に、曲線的



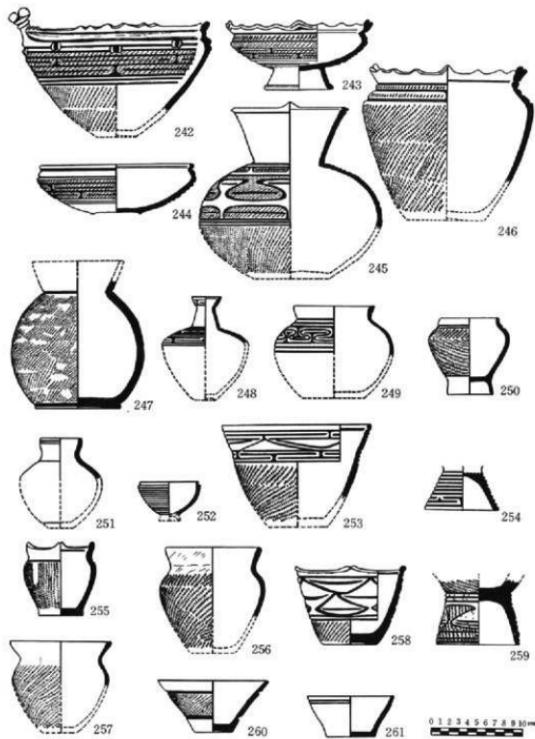
第18図 土器拓影⑩ 第14群土器(201~206, 213)、第15群土器(207, 208)、第16群土器(209~211)



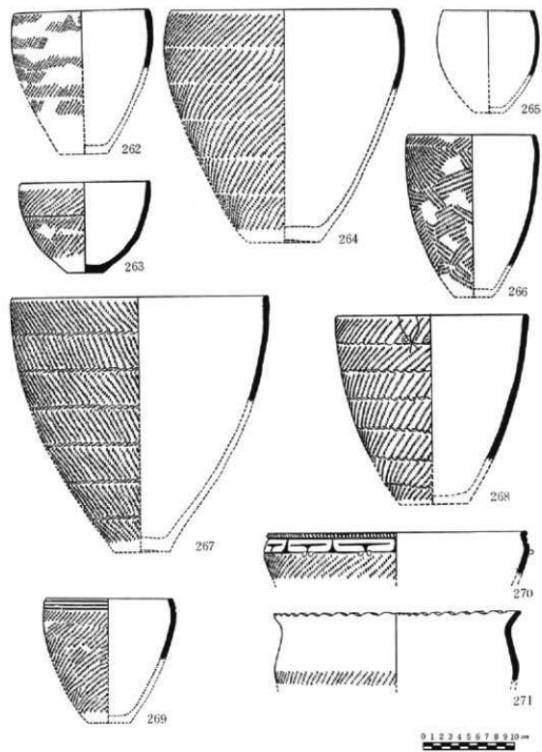
第19図 土器実測図(1) — 第3群土器(214)、第5群土器(215、216)  
第10群土器(218)、第11群土器(217、219～223)



第20図 土器実測図(2) — 第12群土器(224～228)、第13群土器(229～233)  
第14群土器(234、238～241)



第21図 土器実測図(3) — 第14群土器(242~247)、第15群土器(248、249、  
252、254)、第16群土器(250~251、253、255~  
257)、第17群土器(258~261)



第22図 土器実測図(4) — 粗製土器

な工字文を施している。工字文は浮彫されており、文様の特色も少しずつ異なる。これも胎土、焼成とともに大変良好な薄手の土器である。

b類土器 (第21図 248、252、254) 器形は、長堀型 (248)、台付鉢 (252、254)、台付浅鉢などである。殆んど肩部の強った器形である。口縁から胴部上半にかけて浮彫的な工字文を展開している。文様帯は、やはり平行沈線で区画され、内部の工字文を扁平化された典型的な工字文である。まれに平行沈線文だけで工字文とならないものもあり、浮彫的な平行沈線文に特色がある (252)。全面無文化の傾向が強く、沈線文以外のところは無文化され、きれいにみがかれ、さらには朱を塗ったもの (252) もみられる。

**第16群土器** (第18図 209～211、第21図 250～251、253、255～257) “変形工字文”を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第18図 209～211、第21図 251、253) 平らな口縁が多頬気味に聞く鉢 (209)、平らな口縁が外唇気味に聞く、頭部でかかるくしまる鉢 (253)、口縁が外唇気味に大きく聞く鉢 (210) 刃と厚手で丸みのある盃 (211)、平らな口縁が外唇し、肩部のはる壺 (251) などがある。文様の主体はやはり平行沈線を基調としたもので、変形工字文が口頭部の文様帶に施される。変形工字文には小紋の頭瘤小突起が貼付されることが多い、頭瘤小突起は貼付されたものではなく、沈線を施したときにできたり上がりを利用したものもある (211)。文様帶と文様帶の間や体部下半は斜縞文が施されることが多い。殆んどがやや細かなLRの单筋斜縞文である。一般に薄手の器質の良いものが多いが、中には厚手のやや総なものもある (211)。

b類土器 (第21図 250、255～257) 口縁のすばまる台付鉢 (250)、口縁突起を有する頸部のしまる鉢 (255) 全体として変形に近い器形の鉢 (256、257) がある。共通して肩部が張って胴下部が貧弱である。また、口縁が外唇気味であるが、殆んど外傾に近い。外反しているものはない。台付鉢にしても台部が立っている (250)。口縁部は殆んど無文化され1～2条の沈線が加えられている (250、255)。沈線は殆んどLRの单筋斜縞文であるが、羽状を受けるもの (250) や、たてになるもの (255) もわずかに認められる。器質はあまり良いとはいえないが、薄手で、ていねいに施文されている。ここにあげたものは殆んど小型である。

**第17群土器** (第21図258～261) “変形工字文”が崩れたような文様を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第21図 258～259) 器形は、わざかに外唇気味に聞く口縁をもつ鉢、さらには台の立つ台付鉢である。文様は変形工字文がかなり崩れて、工字文の感じがあまりしない独特的の沈線文を体部上半の文様帶や台に施している。鉢の場合には胴下半に、さらに台付鉢の場合は台にも斜縞文を施している。斜縞文が生文様の内部にまで加えられてくることも特徴的である (259)。沈線は単筋が多く、頬が少なく立っているものもみられる (259)。器質はやや厚っぽい感じのする焼きしまりもあり良いとはいえないものである。

b類土器 (第21図 260～261) 平縁の蓋形に近い、口縁の大きく開いた残鉢形である。

平行沈線文が施され、中にはさきに文様を加えたものもある (260)。文様は細かいLRの單筋斜縞文である。器質は大変良好で、焼きしまりのよい薄手の土器である。260などはフタ形土器にもあたりそうな感じで、底部が大変小さい。

以上の第一群土器から第17群土器までの土器はトレンチ毎に出土量をあければ第1表通りである。

第1表 精製土器の分類と出土量

	第2トレンチ	第6トレンチ	第7トレンチ	第2号住居地 (1.5トレンチ)	計
第1群土器	18	12	8	32	70
第2 ハ	5	2	0	0	7
第3 ハ	112	13	110	104	337
第4 ハ	41	3	34	9	88
第5 ハ	14	3	58	5	80
第6 ハ	21	0	61	7	89
第7 ハ	3	0	13	5	21
第8 ハ	11	0	7	3	21
第9 ハ	28	0	20	11	59
第10 ハ	57	1	85	8	143
第11 ハ	145	8	139	58	350
第12 ハ	34	13	79	4	130
第13 ハ	49	18	76	0	143
第14 ハ	48	28	646	40	762
第15 ハ	11	42	185	9	247
第16 ハ	4	7	14	6	31
第17 ハ	2	0	5	0	7
計	603	150	1,666	299	2,718

### 粗製土器

粗製土器と精製土器は、小破片になると分離し難いものも多くみうけられる。また、器形や器質からみると粗製土器であるにもかかわらず、口縁に精製土器と同じような文様を施したものもあり (半粗製とでもいいくべきか?)、粗製土器に含めるか否かも難しい。機能的にみて、器質や文様も考慮して分類した。即ち、煮沸容器としての深鉢、甌になり得るもの、器質も良くない、文様も精製土器の主体文様でないものを粗製土器の中に入れた。さて粗製土器は、その特徴によりさらにいくつかに類別することができる。ただし、典型的なものだけで、あるいはになりやすい、完形土器が少ないためであろう。不充分な分類で問題もあるが、一応粗製土器の傾向を知っていただきためにもその結果をあげておきたい。

### 縄文土器

**第1類土器** 器形は、平縁の直立もしくはわずかに外反する筒状の長胴の深鉢とみられる。口縁がわずかに外反するものは頭部でわずかにしまるとしてみられる。横位、斜位に回転施文される単節の粗い斜縞文を有する。口縁の縞文を削り消しているものもみられる。複合口縁もみられる。厚手で大型である。全般に胎土・焼成とともに粗雑である。

**第2類土器** 器形は、第1類とは同じで、平縁の直立もしくはわずかに外反する円筒的な長胴の深鉢とみられる。口径に対する器高の比が第1類よりも小さくなるらしい。文様は、やはり縦位、斜位に回転施文される単節の斜縞文で、口縁は殆んど削り消しがあり、一条の沈縫で区画して削り消しを加えるものも多い。縞文は第1類より細かであるがやや粗い縞文である。厚手で胎土・焼成ともにあまり良くない。

**第3類土器** 器形は、平縁もしくはわずかに波うつ波状口縁がやや外反し、上に聞く深鉢である。底部は口径に比べて、第1類～第2類に比べて小さくなり、着底面の縁が外へ張る傾向がある。また口径に対する器高の比が第1類～第2類よりも小さく、上下に圧縮される傾向があるようである。横位、斜位に回転施文される、第1類～第2類よりも細かな単節の斜縞文を有する。口縁に削り消しを加えるものが多く、口縁に一条の沈縫を加えて削り消すものもある。厚手の胎土・焼成ともに良くないものから、やや薄手で胎土・焼成ともにやや良好なものまである。

**第4類土器** 器形は、内側に肥厚気味の口縁が外齊氣味に大きく開き、ふくらみながらやや小さな底部へ下降する深鉢とみられる。横位、斜位に短い細かな単節の原体を回転施文する斜縞文を施している。第1類～第3類に比べ、さらに細かな縞文が多い。また、より薄手になり、胎土・焼成ともに、やや良好である。

**第5類土器** (第22図 262) 器形は、内に肥厚する平らな口縁が内反する、ふくらみつづり小さな底部の下降する、半割卵形の深鉢とみられる。文様は、撚りのきつい短かい原体を横位に回転施文する斜縞文である。施文法がやや雑で、部分的に施文しない部分を残したり、部分的に斜位に施文したりする。薄手で器質も悪くない。

**第6類土器** (第22図 263、264、267、268) 器形は、平らな口縁が内反もしくは直立し、胴部上半がふくらみ、胴下半がやや貧弱に下降する、半割卵形に近い深鉢である。文様は、撚りのきつい短かい原体を整然と横位に回転施文された斜縞文である。結束捻糸のあやくり文をもつものも多い。薄手で、比較的器質も粗製土器にしては良好である。

**第7類土器** (第22図 266) 器形は、平らな口縁の内反する菱形に近い、やや胴上半が強引な深鉢である。口縁に比して器高が高く、胴下半が貧弱 (第4類～第6類に比べて) になる傾向がある。文様は、横位に施文される短かい単節の原体の斜縞文であるが、部分的に斜位に施文したりするなど不規則な施文法も多い。薄手で、胎土・焼成ともに良好なものも多い。

**第8類土器** (第22図 269) 器形は、平らな口縁の内反す深鉢である。口縁に対して器高が高くなる傾向をもつらしい。文様は、単節の原体を横位に回転施文する斜縞文である。

口縁は数条の平行沈縫文を有する。縞文は横位に施文するものが原則的であるが、部分的には斜位に施文されるなど不規則な施文法を用いたものが多い。薄手で器質もあまり悪くない。

**第9類土器** (第22図 270) 器形は、口縁が外反し、頭部で盛り出して下降する。菱形になるとみられる。口頭部に平行沈縫文 (割太い) を有する。また、口唇に細かな刻み目を施し、270のように工字形のモチーフをもつものもある。薄手で胎土・焼成ともにあまり悪くない。

**第10類土器** (第22図 271) 小波状の口縁が外反し、頭部で盛る菱形に近い深鉢とみられる。単節の斜縞文を有し、縞文原体の捺りはきついほうであるが、目のあらいものがかなり混じっているようである。全般に薄手であるが、やや厚手のものもある。胎土・焼成などの器質もあまり悪くないのが多いが、かなり差があるようである。

**第11類土器** (第18図 212) 平らな口縁が内口の菱形である。口縁に無文部を残し、刺突列文を加えたり、刻目帯を加えたりする斜縞文を文様とする。縞文は単節の斜縞文であるが、施文法が不規則で、横位・斜位に回転施文する。さらに縦位に施文されるものまである。やや厚手で器質もあまり良くない。量的に少ないのである。

### 羽状縦文土器

**第12類土器** 器形は、平らな口縁が外齊もしくは外傾し、ややふくらみがけんに小さめの底面部に下降する深鉢とみられる。横位・斜位に回転した原体をおり返して転がした羽状縞文を有する。単節の縞文で、捺りのきつい原体を強く押して、ややあらっぽい感じの縞文である。全般に薄手であり、口縁が内に肥厚するものがある。

**第13類土器** 器形は、内に肥厚する平らな口縁が内反し、ふくらみながらより小さめの袖文下降する、半割卵形の深鉢とみられる。文様は、捺りのきつい短かい原体を横位に回転施文する羽状縞文である。施文法がやや雑で部分的に施文しない部分を残すものも少しある。薄手で器質も悪くない。

**第14類土器** 器形は、平らな口縁が内反もしくはほとんど直立し、胴部上半がふくらみ、胴部上半がふくらみ、胴部下半がやや貧弱に下降する。半割卵形に近い深鉢となる。文様は、捺りのきつい短かい単節の原体を整然と横位に回転施文された羽状縞文である。結束捻糸のあやくり文をもつものが多い。薄手で、器質も比較的良好はうである。

### 撚糸文土器

全体として量が少なく断片的な資料であるが、第1次～第2次調査の資料も考慮すれば、次のようなものがある。

**第15類土器** 平縁の直立もしくはわずかに外反する円筒的な長胴の深鉢である第1類～第2類とは同じ器形になるらしいが、器形の全体はわからぬ。文様は縦位・斜位に回転施文された撚糸文である。比較的粗い撚糸文であり、厚手で胎土・焼成ともにあまり良くない。

この他に、網代状捲系压痕文、捲系压痕文を有する、やや厚手の小破片がわずかにあるが、全体を推察することもできないので類別には加えないでおきたい。

#### 刷毛目土器

中間報告書では撫触状沈線文としたグループのものであるが、呼称を撫触状沈線文とするよりも刷毛目文とするほうが適切であるように思われる。

**第16類土器** 器形は、平縁のわざかに外反気味で、上に少し聞く深鉢らしい。器面にびっしりと縦位に刷毛工具でひかいた、やや深く施こされたところの刷毛目文を有する。厚手で、胎土、焼成ともにあまり良くない。

**第17類土器** 器形は、平らな口縁がわざかに外反気味で、上に少し聞く深鉢らしい。口縁部には横位に、体部には斜縦位に施される刷毛目状条痕文を有する。厚手であり、胎土、焼成ともにあまり良くない。内部に格子状沈線文を加えたものもある。

**第18類土器** (第13図 111, 112) 器形は、口縁が内側に肥厚し、外縁気味にやや大きくなぐく、全体としてふくらみかけんの深鉢らしい。文様は刷毛目文が入組のように、あるいはやや格子状に複雑な形にめらかされている。原体の刷毛工具も一本一本が細いものらしく、沈線が細い。薄手で、胎土・焼成ともあまり良くはない。

**第19類土器** (第13図 118) 器形は、平縁または小波状口縁の、直立もしくはやや外傾する、ふくらみかけんに小さな底部に下降する深鉢らしい。文様は細かい刷毛目文を斜めに、あるいは格子状に施すらしい。薄手で、胎土・焼成ともに精製土器に近く悪くはない。

#### 無文土器

量的には織物器の次に多く、無文といって、胎土も焼成も精製土器と殆ど変わらないものまであり、器面調整も良いものが多く、精製土器との区別は明瞭でないものが多い。その中から少なくとも二つのグループが識別される。

**第20類土器** 器形は、内側に肥厚気味の平らな口縁が、外縁気味にやや大きくなぐく深鉢である。土器全体がふくらみかけん、わざかに丸みをもっている。薄手でのものが多く、やや厚手のものもある。胎土・焼成ともに悪くはない。口径に対する器高の比が小さい。

**第21類土器** 器形は、内側に肥厚気味、もしくは板状に厚さの変化がない。平らな口縁が内反気味に直立する。半割卵形の深鉢とみられる。底部は口径に対してかなり小さいものが多い。全体として丸みのある土器であり、口径に対する器高の比は小さい。薄手で、胎土・焼成などの器質は良好なものが多い。

以上のように粗製土器は一応分類された。しかしながら前述したように、完形品の不足等から類別不可能なものも多く、テビカルなものだけでの分類である。しかも器形は復原推定によるものが多く、不明確さを残していることを附記しておく。文様によって分類した粗製土器のトレンチ毎の出土量をあげれば第2表の通りである。

第2表 粗製土器(粗製)の分類と出土量

文様分類	内訳(分類別)	第1トレンチ	第2トレンチ	第3トレンチ	第4号住居址(第1トレンチ)	第5号住居址(第1トレンチ)	合計
斜縫文土器	第1類～第11類	2408	578	8004	81	786	11857
羽状紋文土器	第12類～第14類	71	26	179	5	7	288
無文土器	第15類	5	1	10	0	0	16
刷毛目土器	第16類～第19類	21	0	18	0	0	39
無文土器	第20類～第21類	1503	127	4779	116	729	7254
分類不能他		77	0	84	0	0	161
合計		4085	732	13,074	202	1,522	19,615

以上で土器の説明を終えるが、底部については紙面の都合もあり、ほんのわずかに精製土器や粗製土器の分類の類別におけることができたものだけさっと触れている。実際にはたくさん底部だけの破片もあるわけなので、簡単に略記しておきたい。底部には、①平底(無文)の大きなもの、②小さなもの、③平底(無文)の縁の張っているもの、④平丸底(無文)のもの、⑤丸底(無文)のもの、⑥わざかに凹む上げ底(無文)のもの、⑦台付のものがあるが、①②と③に木葉痕をもつもの、網代底がみられる。また、縦形の底部などもわずかにある。

## 2 石器

出土した石器は第3表に示した通りである。今回の第3～5次の発掘調査では422点の石器を発見している。大別すれば打製と磨製の石器であるが、打製石器の大半は硬質頁岩製であり、小形の石鏡などに特殊な石質が見られた。磨製石器は殆んど安山岩であるが磨製石斧などに硬い石材が使われていた。また石核が30点余り、石片が1,039点出土している。石片は2cmから15cmまでいろいろであるし、薄い石核に二次的な加工が施されているものもある。これらから石器製作技術上の分析はまだ行なっていない。石器の時期推定は前述のように伴出土器が擾乱された状態にあって確定できなかった。第3層より下部には晚期の土器が多くだったので殆んどがこの時期にあると思われるのだが、時期は避けない。以下一括して紹介してしておくこととする。なお調査による石器の総数は下表のように統計1,068点を数えるに至った。

第3表 出土石器の種類と出土数

調査次 石器名	表面採集	第1次調査	第2次調査	第3次調査	第4次調査	第5次調査	合 計
石 總	34	80	82	21	83	9	309
尖頭形石器				1	7	2	10
石 斧	6	11	13	2	13	2	47
石 刀	3	4	16	4	19	4	50
石 べ ち	1	3	8	3	7	1	23
小形円形石器				1	2		3
打製石斧		1	1	1	2		5
不定形石器	14	105	145	36	75	13	388
円盤状石製品			1	3	1	2	7
磨製石斧	12	21	13	4	13	1	64
石 刀					1		1
石 縛		1	2	2	3	1	9
石 悅	2	4	5		3		14
石 冠					1		2
石 鏡	1	4	10				15
浮子石			1		2		3
四 石	12	17	12	28	6	75	
磨 石	5	2	7	15	3	32	
燧 石				2			2
石 瓦	1	1	1	5	1	9	
合 計	74	253	319	96	283	43	1,068

石 鏡 (第23図) 石鏡は113点出土している。これは金石器の26.6%にあたる点数で比率が高い。石質は暗灰色、明灰色、暗褐色、茶褐色などの硬質頁岩が大半を占めている。硅化の強い頁岩も多い。そのほか乳白色の石英岩、暗赤色の軟石英、緑色の頁岩、白と赤とまだらの玉髓質、あるいは瑪瑙、黒曜石などが含まれ多種多彩である。大きさは計測可能な93点についてみると、長さが2.4cm以下の小形の石鏡は37点、2.5～3.9cmの中形の石鏡は48点、4cm以上の大型の石鏡は8点であった。頁岩以外の石質は小形に多いという傾向にあった。これは原石の大きさに関連するためと思われる。前報告では石鏡の形態によって4つに分類しておいた。今回の出土品は形態的特徴と特に基部の成形状態によって16に分類してみた。

1類 (1～4) 基部を形成する際に肩部が内側に入り込んだ形の有茎石鏡である。4点出土している。2の肩先が斜め下に突き出すような形が典型で、他は傾斜が浅い。3、4は黒曜石製で左右非対称である。小形の石鏡である。

2類 (5～12) 肩部が水平で直線状をなす有茎石鏡である。10点出土している。5、6などの幅広い例が特徴的である。小形が多いが、中形も少し含んでいる。

3類 (14～16、20、22、25～28、31、33) 肩部が外側に傾斜をもち、肩部と茎部の境界が角を形成していく判別できる有茎石鏡である。14点出土し13.1%にあたる。14、16のように茎部が細長いものと15、25のように茎部が舌状に突出するものがある。中形が多く、小形は少ない。

4類 (17～19、23、24、29、30、32、43、44、46、49) 肩端から茎部先端にかけてややかな内凹する曲線を描き、肩部と茎部の境界点がない有茎石鏡である。22点出土し20.8%で最多数を占めている。中形が多く、大形も見られる。細長のスラリとしたもので、茎部は舌状に形成され全長の半分に近い例もある。

5類 (13、34～37) 石鏡の先端から肩部にかけての周辺がやや内凹し、肩部が円く張り出した筋縫形に近い有茎石鏡である。5点出土している。細身で中形、下ぶくれの感じである。13は茎部下端が欠失しているが、全長5.3cm、幅1.4cmの最大例である。

6類 (21、38～40) 幅広い不整な四辺形の一隅に細長い茎部を形成した有茎石鏡である。4点出土している。茎部が全長の2分の1に達し、茎尖部は純角である。小形である。

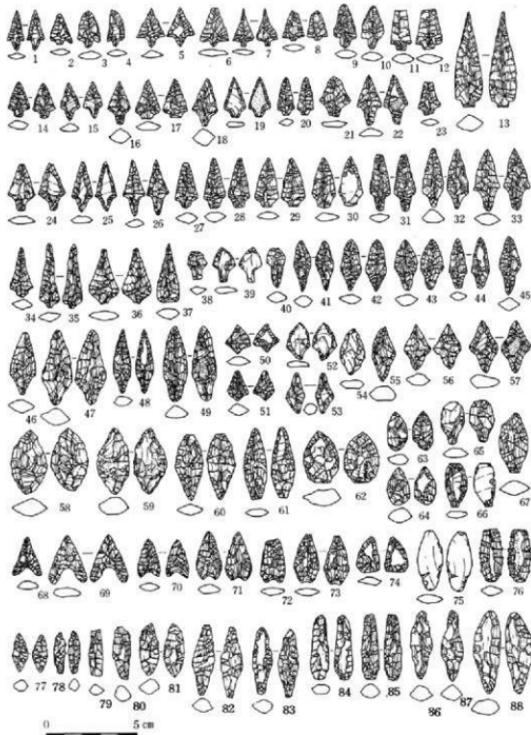
7類 (65～67) 箱内状の本身の一端が尖り、一端に茎部を作出した有茎石鏡である。5点出土している。

8類 (76) 石鏡の両側辺が鋸歯状の凸凹をもつ有茎石鏡である。1点だけの出土で両端が欠失している。

9類 (50～53、56、57) 幅広く小形で全体が菱形に近い石鏡である。6点出土している。50は長1.5cm、幅1.4cmの最小例である。

10類 (41、42、45、55、60、61、75、82) 脊のスラリとした中形から大形の菱形をなす石鏡である。8点出土している。どちらかが基部か先端が不明なものが多い。

11類 (54、58、59) 幅広い菱形を呈しているが両側辺の角が円く整形され、断面が部厚



第23図 石器—石錐

い凸レンズ状の石錐である。3点出土している。中形が普通である。

12類 (62~64) 横円形の一端が尖り、基部はそのまま円く形成された石錐である。5点出土している。小形と中形である。断面は部厚い。

13類 (68, 69) 基部にやや縦い抉り（わたり）が形成され、両脚が先端から延びる直線上に作出された無茎石錐である。2点出土している。

14類 (70~73) 最長幅が下半部の中央にあり、基部でしまる抉りの浅い無茎石錐である。5点出土している。やや細身である。

15類 (74) 二等辺三角形をした小形の石錐である。1点だけ出土している。

16類 (77~81, 83~88) 全形が棒状を呈する石棒である。12点出土し11.2%である。断面が円形に近い部厚いもので小形、中形、大形のいずれも出土しているが中形が多い。大半がいずれが先端部なのか判別しかねるが、84、85のように下端がくびれて基部らしく整形された例もある。やや全形が細長い形態に近いものと全く両側辺が平行して次第に尖るものがある。

以上破片のため類別不能であった6点を除き、107点を16に分類してみた。この16類はさらに大別することが可能であるが、第1、2次調査で出土したものも含めて検討してみたい。またアスファルト附着の石錐があるがこれも後述したい。今回の調査で2、3、4類とした有茎石錐が合計で43%に達する。神矢田遺跡で最も普通的な形態であったと思われる。16類も比較的多い。なお類別と石質に特別な関連の傾向をとらえることはできなかった。石錐の加工法は両面加工が原則であるが、半両面加工や周辺だけの加工、削片をほとんどそのまま利用したと思われるものがあった。

**尖頭形石器**（第24図112~121） 石器の一端あるいは両端が尖り、刺突の機能が可能な形態をもった石器を尖頭形石器とした。10点出土している。形態的特徴と製作技術上の特徴から3つに分類できた。すべて硬質真岩である。

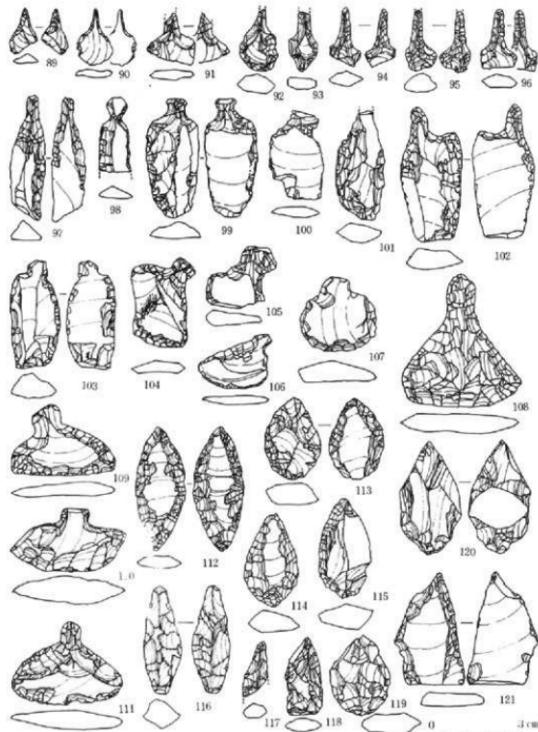
1類 (112~115) 全形が横円状で両端が鈍く尖り、やや幅広な例である。4点出土している。周辺だけ両面に加工されている。卵形が基本らしい。

2類 (116, 117) 細身のスラリとした例である。両端が同じように尖る。2点出土している。両面が全面加工されている。

3類 (118~121) 先端部の左肩に削ぎ取るような剥離面が走り、尖る部分を作出した例である。4点出土している。大きさは一定でない。技法が旧石器時代の形態の製作に似ている。

以上の尖頭形石器としたものは必ずしも石槍や鉤のような刺突を唯一の機能とした石器とは限らないかもしれない。現在の彫刻刀のようなあるいは刺し切る、刺し剥ぐような使用も考えられる。正面から見て一端あるいは両端が尖るので仮に尖頭形石器としておく。

**石錐**（第24図89~96） 石錐は17点出土している。このうち針部が完全なのは5点で他は欠損品である。針部の形態は89、90のように基部から自然に突出して頭かく銳利に尖るもの



第24図 石器—石錐、石匕、尖頭形石器

と、94、96などのようにやや太く長く断面が四辺形をなして舟型に形成されるものがある。この基部は石片の一部に整形打を施しただけのものが多いが、92、95のように全周辺に加工されている場合もある。

**石匕** (第24図97~111) 石匕は27点出土している。一様につまみが作られ刃部とのなす角度によって縱形、横形という分類が一般に行なわれている。前報では3つに分類しておいたが、今回は5つに分けてみた。なお105のようにつまみの部分だけ出土して、全体が不明なものが7点出土している。

1種 (97~101、103) つまみと刃部が平行するいわゆる縱形の石匕である。8点出土している。97のように細身で先端が尖る例と、99のように幅広で先端が円い例がある。

2種 (107、109~111) つまみと刃部が垂直に交わるいわゆる横形の石匕である。4点出土している。107は全体が橢円形をなす。109は刃部が直線的である。

3種 (108) 全体が船のような三角形を呈し両面に全面加工が施された石匕である。2点出土している。横形の一種と考えられるかもしれない。

4種 (102、104) 長方形の一隅につまみが作出された石匕である。3点出土している。素切り庖丁のような形態である。縱形の一種とも考えられる。

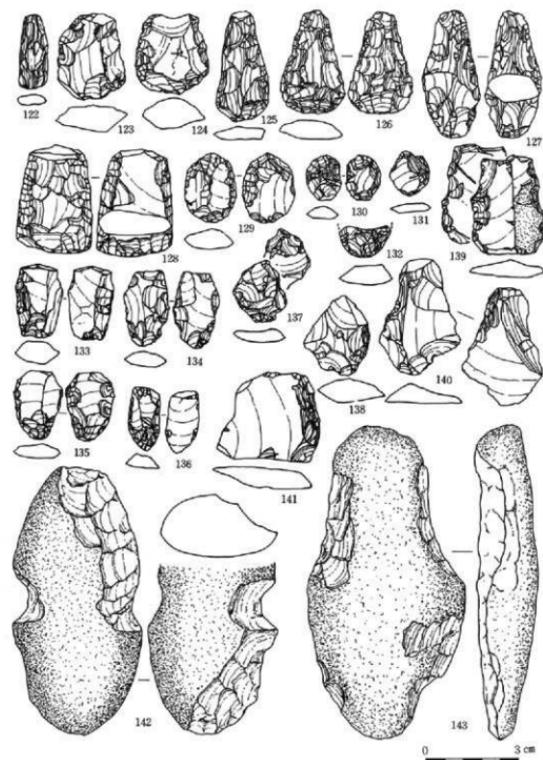
5種 (106) 不整な三角形を呈し、つまみが刃部と45度で交わる石匕である。3点出土している。いずれも小形で出しだし小刀のような形である。

以上5つに分類したがつまみだけ見るとなお、102、107、108、111は棒状で抉りがない。98、99、104などはつまみの抉りが顕著である。また全面加工は3種だけでは周辺加工である場合が多い。

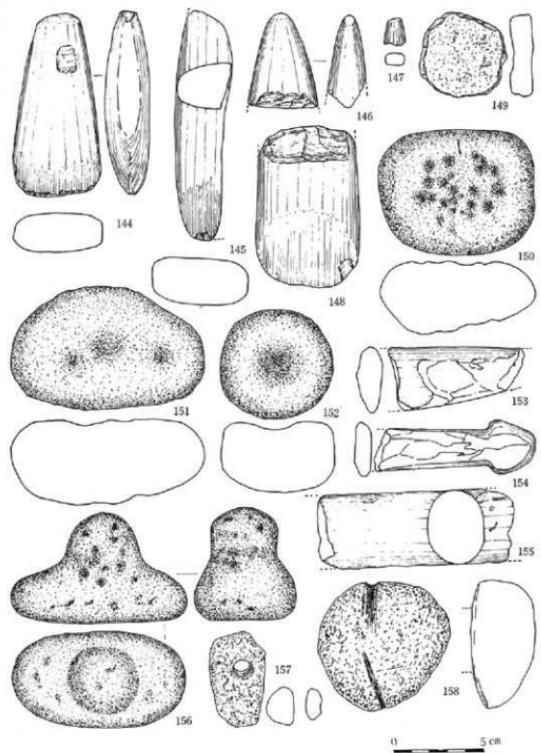
**石べら** (第25図122~128) 石べらは11点出土している。122は小形のもの、123、124は中形幅広のもの、125、126は鋸歯形のもの、127は橢円形に近いもの、128は大形幅広のものである。いずれも両面あるいは片面加工で断面は凸レンズ形を呈している。

**小形円形石器** (第25図129~131) 直径4cmに満たない小形円形に整形されている石器である。3点出土している。

**不定形石器** (第25図132~141) 特定の形態をもたないが剥片の一部に再加工が施されており、石器として製作された意図がうかがわれるものを不定形石器とした。124点出土している。この中には132のように他の石器の破損品と考えられるもの、あるいは石器の未成品と考えられるものもある。石質は硬質頁岩が90%以上であるが、5cmに満たない小形のものには石錐で示したような石質が見られる。2cm以下の中形のものから12cmに及ぶ大形まである。大半は剥片の一端に刃溝のような加工が施されたものであるが、両面に整形打が打たれているものもある。133~135は長さ4cm前後、幅2.5cm程の大きさで、再加工を施しているのであるが、これらは石錐の製作過程にあるのではないかと思われる。このような剥片が非常に多いことも事実である。このほか整形加工が抉入状に打たれているものもある。またわずかに磨滅しているものもあり、刃器として使用されたことが知られる。



第25図 石器—石べら、不定形石器、打製石斧



第26図 石器—磨製石斧、円盤状石製品、凹石、石刀、石剣、石棒、石冠、浮子石

**打製石斧** (第25図142、143) 打製石斧は3点出土している。1点は石べこを大形にした両面加工の製品である。142は長さ14.6cm、幅6.9cm、厚さ3.4cmの花崗岩質の打製石斧である。正面右上と背面左下に整形打が施され、上下端は平たく尖っている。両側辺の中央部には抉りが作られている。自然面を大きく残しながら美しい石斧に仕上げられている。143は長さ16.9cm、幅8.6cm、厚さ3.3cmで142よりやや大形の石斧である。正面下半部の両側辺に整形打が見られる。上半部の側辺は基部形成の削離面が連なっている。背面は全面が整形され、上端部は厚目に下端部は刃部として尖っている。安山岩質である。

**磨製石斧** (第26図144～148) 磨製石斧は18点出土している。完形品は144の1点だけである。他は欠損品である。146のような幅1.2cmの小形から、148のような幅5.7cmの大形まである。すべて両刃で断面が隅丸の長方形を呈する定角式石斧である。石質は流紋岩、緑色凝灰岩、安山岩などである。刃部の使用痕は激しい。ほとんどが使用中に欠損したとの考えられる。

**円盤状石製品** (第26図149) 直径5cm前後の円盤状の石器である。3点出土している。安山岩質である。断面は長方形が台形をしており刃部はない。金剛刃を円形に垂直に近い角度で欠き取っていったもので、厚さは1cm前後である。

**石刀** (第26図153) 石刀の断片が1点出土している。残存する長さは7.5cmで断面は楔形を呈し、下端部は鋭い刃部である。右端は次第に上縁邊にすばりやすがて尖るものと思われる。粘板岩製のため破損している。

**石劍** (第26図154) 石劍の断片が6点出土している。いずれも粘板岩製である。153は石劍の頭部である。断面は長楕円形をなし文様はない。

**石棒** (第26図155) 石棒の断片が3点出土している。154は緑色凝灰岩質で両端を欠失した石棒である。残存する長さは10.8cmで断面は長軸が4cmの楕円形を呈している。

**四石** (第26図150～152) 四石は46点出土している。安山岩質のものである。円形あるいは横円形の扁平な河原石の両面あるいは側邊に凹みが形成されている。150は両面に無数の凹みが作られているもの、150は両面に2、3個の凹みが作られたもの、152は上面に1コだけやや大きめの凹みが作られたものである。四石は以上のような3つの類型に分けられるようである。152の例は3点だけ小形である。他は150、151のような例が相半ばしている。中には面を取ったような形跡もあり、側邊に凹みが作られている場合もある。152の直径6.2cmが最も大形で、長軸13cmの楕円形が最大例であった。

**石冠** (第26図156) 石冠は1点出土している。高さ6cm、長さ9.7cm、幅5.3cmである。上部は半円球状にふくれており、基底部は楕円形、底面は平らである。球頭形の石冠といえよう。安山岩質である。

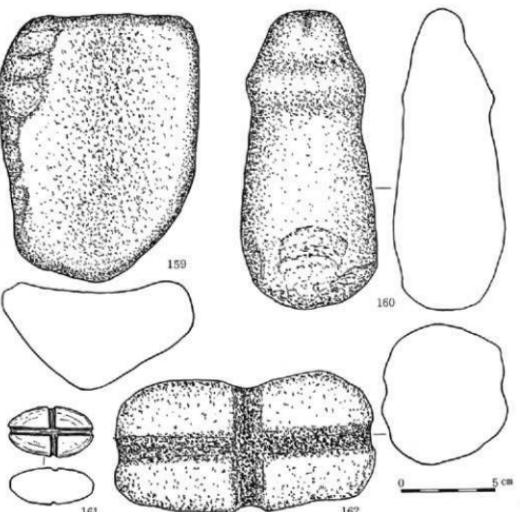
**浮子石** (第26図157、158) 軽石を加工した浮子石が2点出土している。157は直径1cmの穴を開けたものである。158は直径6.5cmの半円球を呈し、紐の磨り痕のような溝が2本残っている。断面の中央部直徑3.5cmの部分は欠失した様子があり、そのまわりにドーナツ状の磨り痕があるので、ヨーヨーのような形であったかと思われる。

**石皿** (第27図159) 石皿は7点出土している。安山岩質の製品で158のように中央に縦に溝状の凹みが作られているのが2点である。他は比較的小形であり、中央部に円い凹みが作られている。

**磨石** 磨石は25点出土している。安山岩・花崗岩質のもので半大の肩平な河原石の全面に磨った跡がある。

**砥石** 砥石は2点出土している。安山岩を使って1～3面の細いだ跡が残っているものである。

その他第27図の160～162は新たな表面採集資料であるが、160は男根擦拌と思われる石棒であり、161は土鉢、162は石鍬である。なお160のような石棒はもう少しあるものがもう1点採集されている。162の石鍬は神奈川で最大のものであり十字形に溝が作出されている。

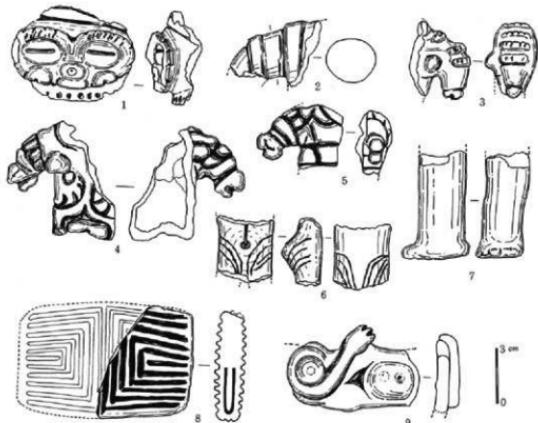


第27図 石器—石皿・石棒・石鍬 (石皿は×)

### 3 土 偶

土偶は7点出土しており第28図に示した。いずれも欠損品である。またすべて第7トレンチから発見され7は第1層下部から、他は第2~4層に出土したものである。出土した附近にはそれぞれ晩期の特徴的な土器片が伴出するのだが、擾乱状態が見られ決定的な時期推定資料とは思えない。以下簡単に説明しておきたい。

1は土偶の顔面である。残存部の高さは5.1cm、幅6.8cmである。頭部を含めて他は欠失している。透光式土偶の顔面で頭部は中空である。黒褐色の精製された堅固な土質である。横幅の構造形を呈した顔面が圓筒形のように突出している。大きな目、丸くあいた口、額や頬にも半円状の浮き彫りがある。眉には細い纏文が打たれている。首には横に6個の刺突文がある。全長が30cm前後の立派な土偶であったと思われる。大洞C<sub>1</sub>式の土偶と考定されているものに類似している。附近に大洞C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>式の土器が多く、纏文晩期中葉と考えられる。



第28図 土製品 土偶・土版・土器口縁部装飾

2は土偶の肩部である。上腕部に腕章のよう2本の装飾がある。左右どちらの腕か判別できない。かなり大型の土偶と思われる。

3は土偶の左上半身である。黒褐色のやや匂い砂質粘土を使っている。左の乳房が残っており、肩から上腕部に肩章のような装飾が3つついている。手はこぶしを二股にしたような作り方である。肩の肩章の跡みに朱が残っている。

4は土偶の右上半身である。頭部から左胸部と背中を失っている。現存部の高さは6.3cmである。精製粘土を使った黒褐色の中空土偶である。乳房の見られる正面の腹部には波か炎を形容するような円弧状の曲線文様が描かれている。上腕部には小箱を連ねた腕章のよう浮き彫りがある。手は握った時のような状態が2つにくびれた団まりとして作られている。下端部は股のように観察されるが、腰部から大腿部にかけてのふくらみは欠損している。胸部の中空部には胸骨に上腕部を接合して作成した痕跡が残っている。5は土偶の左腕と背筋である。乳房のある胸部が欠失しているので左腕と考えられる。4と大きさも装飾された文様も似ているが接合しない。わずかに文様や手の形に相違がある。しかし両者とも同じ時期にあったものと考えられる。大洞B式頭の土偶と思われるが晩期初頭としておきたい。

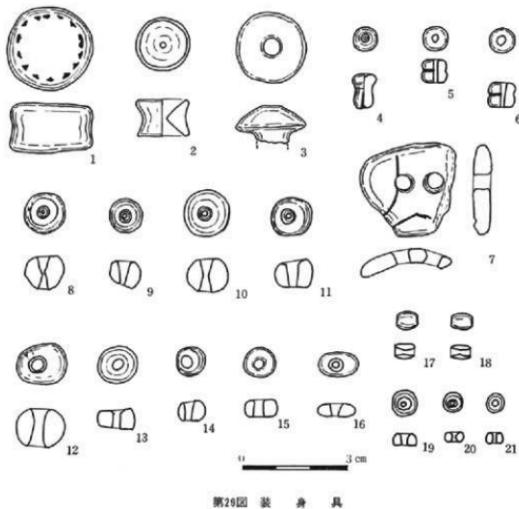
6は土偶の腹部である。赤褐色の砂質粘土である。現在部の高さ3.3cm、幅3cm、厚さ2.2cmで小形の土偶と思われる。腹部以外は失われているので上下がはっきりしない。正面と背面には両脇から中央へ3~4条の曲線が平行して描かれている。腹部の中央に横のような凹みがあり直線の弦線が走っている。腹部が異常に突出しているので妊娠を模した土偶と思われる。なお下端部は股のように観察された。後期の土偶であろうか。

7は土偶の脚部である。砂質粘土を用い黄褐色である。高さ5.9cmで円柱のよう脚部には扁平足の足がついている。足先には刻みで指をつけたらしいし、踵も作られている。このままだと立つことができる。正面図やや内側あるいは側面しているが、左右どちらの脚か判別できない。足の裏面にわずかに朱が残っている。後期の土偶と思われる。

以上の7点を加えて土偶は15点出土したことになる。すべて欠損品であるが後期が7点、前期が6点である。晩期の土偶はさらに詳細な時期を推測できるのだが、後期の土偶も不明な点が多い。今後の検討を要する。

### 4 装 身 具

**耳 簋**（第29図1~4）耳飾は4点出土している。いずれも土製品である。またもともと朱塗りであったと思われる。1は壘單車のもので直径2.5cm、高さ1.4cmである。上面に三角の刺突文が円を描いて施してある。2は白形で直径1.5cm、高さ1cmである。3は算盤玉のような欠損品であるが、粒状耳飾の一種と思われる。直径は2cmである。4は小形の棒状耳飾と思われる。穴は貫通していない。直径0.7cm、高さ1cmである。これらはすべて耳栓形式で耳朧に穿孔して挿入し使用したものと思われる。今回の出土品は晩期の土器の多出地点であるので、それに併行する時期かと考えられる。



第29図 装身具

五 (第29図 5、6、8~21) 玉は16点出土している。翡翠、流紋岩、緑色凝灰岩など硬質の緑色を好みて原材としている。5、6は粘板岩質で直径、高さともに0.7cmである。両方ともダルマのようにくびれがあり耳鉢とも考えられる。6は朱塗りである。16も粘板岩である。8、10~13は直径が1cmを超える大形の丸玉である。9、14、15、19は中形の丸玉、20、21は直径0.5cm以下の小形の丸玉である。17、18は橢円形の長軸方向に穿孔しており管玉の類と考えられる。穿孔法に上、下両端から穿孔した例と、一端から穿孔した例がある。後者は上下に水平な面が形成されている。遺跡から磁鐵鉱の小片が出土しているが、これを粉粒にして金剛砂のように穿孔に使用した可能性がある。硬度が高いためだけ穿孔したとは考えられない。なお7は調査期間中に表挿したもので、緑色凝灰岩製の垂飾品と思われる。2個の穴が穿たれており、沈縫の曲線文様は意図的なかどうか不明である。

## 5 その他の遺物

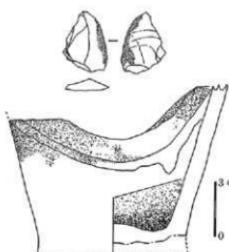
以上のほかにも人工あるいは自然の遺物が出土しており、現在同定中のものや特殊な事実を記録しているものもある。ここではそれらを紹介しておきたい。

土瓶が1点出土している。第28図8に示したもので半分以上が欠失しているが、復元すれば横9.6cm、縦6.4cm、厚さ1.2cmの大きさであろう。画面に沈縫のコの字形文様が対称的に施されており、側面にも長椭円形の沈縫がある。溝の中に朱が残っていて朱塗りの土瓶であったことが知られる。第29図9に示したのは土器の口縁部の破片である。黄褐色の砂質粘土で粘土層の接着部が欠損したものである。右部分の溝引きから口縁部に三本指の手が装飾してある。その右側に三叉状の沈縫があり、さらに右側に橢円状の隆起がある。この部分は磨滅しており明瞭ではないが、目を換じたような凹みがあり顔面ではなくかったかと思われる。後期前半の製品と思われる。また第20図25は朱の顔料を保存していた小壺といえる。外側も朱塗りであるが内部に朱の塊が入っている。おそらく天然の辰砂かと思われる。第30図の土器は漆の容器と思われる。茶褐色の精製土器でヘラで研磨している。底部の破損品であるがドットで示したような状態で真黒な漆が附着している。内部の底はもちろん現在の口縁から外部まで流れ出ているので、こわれた土器を使用したと考えられる。現存部の高さは9.3cm、口径11.4cm、厚さ0.8cm、底径8.2cmである。上部に横位の単節纏文がわずかに見られる。土器の上の石片は硬質頁岩であるが、ドットに示した部分が刃器として使われただけでなく、植物の汁が染み着いたようにな黒ずんでいる。これは自然の漆を採取するのに瓢箪皮を切るための器具ではなかったかと考えられる。両者とも表面採集の資料である。朱を使用した土器、装身具などはかなり出土しているのが漆の使用を明示する遺物はまだ検出されていないので問題として残る。

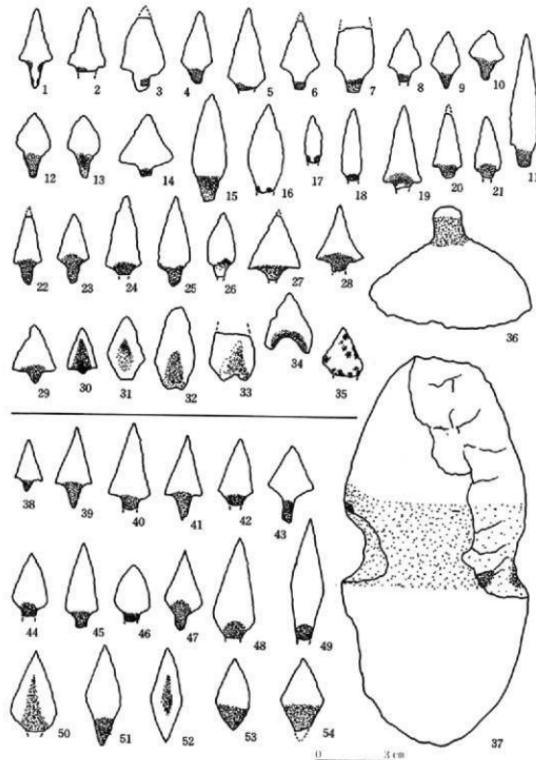
自然遺物としては木炭片や植物の種子、骨片、貝殻などがある。木炭片は床面や仰避から出土しており量的にも多い。植物の種子はクルミが多いが現在のものよりや小ささい。また榧の壳と思われるものがある。

骨片は数点出土しているがいずれも1cmにも達しない小片が多く、磨滅したり碎れたリとしていて原形をとどめていない。若干形を整えたものが表面採集されているが現在同定中である。おそらく小動物の一骨と思われるが定かではない。

自然遺物は比較的見発見が少なかった。また伴出土器の決定が困難な状況にあり、時期の推定もできなかった。



第30図 漆 植 集 具



第31図 アスファルト附着の石器 (38~54遊佐町藤崎・神矢道跡出土)

## 6 アスファルトの附着した石器

アスファルトの附着した石器は前報の段階でも気づいていたが触れておなかなかった。今回さらに資料が増加しているので第1次から第5次までに出土した資料をここで一括して説明しておきたい。アスファルトの附着が観察された石器は石匕・打製石斧・石錐の三種である。数量的には石錐が圧倒的に多い。第31図はドット分布で附着状態を示したものである。表面も同様の状態が観察された。1~37は神矢田出土であるが、38~54は遊佐町藤崎・神矢道跡で出土した例である。また作団にあたって石器に黒いかたりりが接着している場合もあったが、それが剥げ落ちても黒づくろい色が観察されたのでその部分も図に示しておいた。また黒いかたりりを化学的に分析していないが、膠着材としてのアスファルトと考えられる。

**石匕** (36) 石匕はつまみの部分に幅1.1 cmの帯状にアスファルトの附着した例が1点出土している。2類とした横様の石匕であり、着柄して使用したものと思われる。

**打製石斧** (37) 打製石斧の中央抉入部を中心にして幅3.3 cmの帯状にアスファルトが附着している。やはり柄石のためと思われる。やや軟弱な安山岩質の製品であるが、両端の刃先に鋭い強頭さは乏しく、土掘り鉤のような用途を想定するのが妥当である。

**石錐** (1~35) アスファルトの附着した石錐は35点があり、これは金出土品の約12%にあたります。これらを附着状態から分類すると次のようになる。

1類 (1~9, 11~18) 附着が茎部だけに限られるもの。17点出土している。

2類 (10, 19~29) 附着が茎部と肩部の高さよりやや上部まで及んでいるもの。12点出土している。

3類 (30~33) 附着が石錐の両側辺と平行して三角形状に入り込んでいるもの。4点出土している。

4類 (34) 無蓋の石錐のわたくりの部分に附着しているもの。1点出土している。

5類 (35) 石錐の全面に附着しているもの。1点出土している。

以上神矢田では5つの類型を考えることができる。神矢道でも同じ傾向をとらえることができるが、33, 34は変形の石錐の下半部に附着しており、これを6類としておきたい。

石錐にアスファルトが附着している状態は着柄する技術や使用する方法と密接な関係をもつと思われる。1, 2類には有茎石錐が多い。これらは石錐の茎部にアスファルトを塗布し、尖端の先端に差し込んだり、割りさいた部にはさみ込んで緊縛したと考えられる。3~6類も同様の使用があったかもしれないが、3, 6類はいわゆる燕形鉗頭の先端部に装着された可能性がある。また石錐のその形態的な相違に時期的な差異であるかもしれない。

なお使用されているアスファルトは島海山麓に自然に湧出するピッチャ状のものを使用したと思われる。島海山西麓の湯の谷附近では戰時中までバケツをもってアスファルトの採集に行き、重根などの出来に使用していたという。

## 第4章 考 察

### 第1節 神矢田遺跡出土の土器編年について

神矢田遺跡出土の土器は多様である。第1次～第2次調査の段階においてはその報告に述べたように16群の土器を得ている（1971、佐藤）。第3次～第5次調査においてはその内容を一部修正の上、同じ内容の16群の土器と新しい内容の1群の土器を得ることになった。そしてこの17群の土器に伴なうとみられる21類の粗製土器を得ている。この17群の土器にはいくつかの問題が横たわっているが、とくにその編年の問題は本稿（または庄内地方）において大きな関心を寄せられている。とはいものの、編年の問題にとりくむに充分な資料はいい難い。したがって、本稿は本格的な編年研究よりも一研究者の私見の概略を記したものとしたい。これが今後の編年研究の手がかりともなれば幸いと思う。

#### 1. 後期縄文式土器の諸グループの編年

東北地方における後期縄文式土器の編年研究は他に軽べ立ち遅れはいるが、ここ数年来その研究は急速に進歩している。もはや各地に存在する内容の概略が明らかにされ、その変遷の順序の大綱ができたといえる。しかし型式把握には問題があり、進展をみていない。それ故神矢田の土器の編年を行なうことは大切な意味をもっているといえる。器形・文様帶の構成・施文技法などの観点より県内の主な資料を参考にしながら神矢田の出土土器の編年的位置づけを考えてみよう。

#### 第1群土器

曲線的なタチのモチーフをもつ磨削縄文を有するこの一群の土器の主体器形は深鉢である。口縁が直立する傾向があり、口縁が外反し、ゆるくくびれる副長の器形が推測されるが、大木10式によくみられる器形である。口縁の外反は大木9式の仲間に少しもあるが、主体はキャリハーネーの名残りをとどめる外縁（注1）であり、大木10式の深鉢形土器の仲間に多くみられる。また文様は体部文様帶（II文様帶—山内清男、1964）が主体であり、C字状・横円状になるとみられる曲線的な磨削縄文を有する。大木10式特有の磨削縄文のタイプであり、沈鉢凹面によるものもあるが、無文部と縄文部の境に貼付縫織文もしくは縫狀の突起（あまりないか）がみられるのである。縫文は一縫縄文もあるが一般に回転縫文の撚糸文が多用される。粗製の第1類土器は中期特有の粗大な筋目の纏文であり、縫文の撚糸文器である第15類土器や模擬の撚目文ともいって粗糲な刷毛目文の第16類土器とともに共通要素が多い。他の遺跡でみると伴出する傾向性がうかがえるので、伴出するものと考えたい。

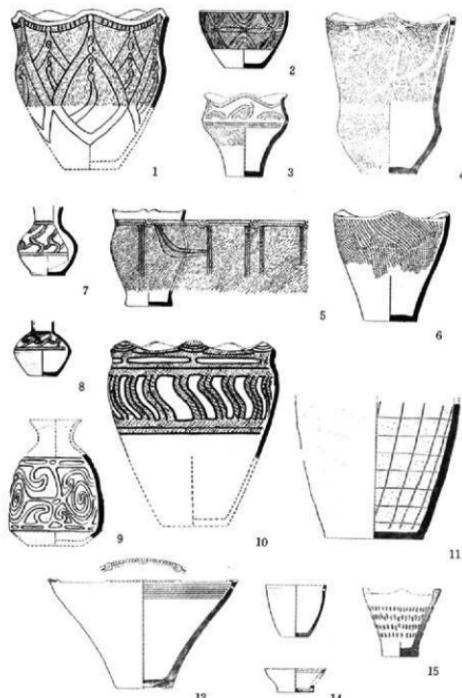
このように見てみると、大木10式的仲間といえよう。しかし、同じ大木10式的仲間であっても宮城県と山形県では少し異なる点があるとともに、大木10式の概念を実際の資料に適用する

際に研究者によって解釈の違いなどもみられるようなので、大木10式そのものという表現はさし控えない。またそれは断片資料でもあることにもよる。ともかくも、大木10式的仲間は越後大蔵村白須賀遺跡（柏倉亮吉、1969）や米沢市童森B地点（注2）において詳しいが、庄内地方では、道町小山崎遺跡・三崎山遺跡・八幡町浜沢遺跡など鳥海山麓にも資料がある。

**第2群土器** 資料的に乏しく断片化すぎるが、無視できない。体部文様帶（II文様帶）が主体で貼付縫織文による磨削縄文の区画縫織がみられ、垂下する部分にはタチに刻みを加付するものもある。主体となる深鉢における口縁の外縁と波状は大木10式ともみられない。宮戸I式（後藤謙彦、1962）や袖窓式（林謙作、1965）など宮城県の資料、門前貝塚第二類（吉田義昭、1960）など岩手県の資料などとの検討をすすめにふさわしいまとった資料をとり出すことが今後の問題である。そしてさらに関東の船名寺式（吉田信1960）との関連を把握しなければならない。

**第3群土器** （第32図1～6） 量的にも内容的にも豊富である。主体器形の深鉢・鉢において口縁がゆるやかに底をうつものが多くなり、中期にはみられなかた新しさを感じる。口縁は外反して開き、口唇が内曲する。第1群、第2群とも大きくさがっており、壺や甕のような器形のものが多くなる。体部文様帶（II文様帶）に主文様がタチのモチーフでつくりさえされるが、完全に沈線化され、渦巻文や同心円文を中心にしてそれをつなぐように施こされる。器形の縦位回転式の撚糸文の上に沈線を加えた文様であり、あまり磨削縄文が用いられない。磨削縄文は口縁部周辺にみられる。撚糸の撚糸文がみられることが磨削縄文を用いられないから中期的なムードをもっているが、貼付縫織文は所んどみられず、文様が沈線化しており後期的特徴をもっている。渦巻文や同心円文はこのグループ独特のもので、同じ時期と考えられる東日本一帯の土器にみられる。関東の堀之内I式（岡本、戸沢、1965）や宮戸I式（後藤謙彦、1962）、南境式（伊東信重、1956）などである。しかし、撚糸文を地文とするものはかつての大木式土器文化圏ぐらいの範囲に分布するようである。したがって東北南部の土器といよいよ。それも本県一帯に限って分布するようにも思えるほどである。口縁部に刻みを施こしたり、溝を施工したり、貼付縫織文を垂下せたりするものがすこしに含まれる。おそらく堀之内I式にみられるものであろうか。堀之内I式は東置賜郡高畠町宮下遺跡（佐々木洋治、1971）にみられるが、本県北端では殆んどみられない。わずかに上記のような堀之内のものが各遺跡の土器の中に混在してくるだけのようである。庄内地方では鶴岡市道町三崎山遺跡（柏倉亮吉、1969）（第32図2）、田川地方では鶴岡市谷定遺跡（注3）にティカルに存有し、山形市谷代遺跡（川崎利夫、1967）（第32図4～6）や米沢市上竹井遺跡（注4）（第32図5）なども好資料を出土している。粗製土器としては、斜縫文の第2類土器、撚糸文の第15類土器、撚目風の刷毛目文の第16類が伴なうものとみられる。宮戸I式または南境式の仲間である。堀之内I式に併行するとみられるこの土器グループは内容が複雑にみえるが、まだ良好な資料の発見が少ないので、もう少し時間有待で、内容が明確になってくるであろう。

**第4群土器** （第32図7～14） 鉢・鉢形では、第3群土器と殆んど変わりないが、口縁



第32図 県内各地の後期初頭の土器群 (1, 7, 9 神矢田遺跡、2 道佐町三崎山遺跡、3, 13, 14 村山市川口遺跡、4, 6, 8 遊佐町丸池遺跡、5 米沢市上竹井遺跡、8 遊佐町丸池遺跡、10 真室川町小川内遺跡、11 村山市土生田遺跡) — 縦尺 1/8

がさらに聞く傾向をもち、外縁気味のものや波状口縁の波頭部が舌状に張り出しが多くなり、第5群、第6群土器への変化を想定させる。しかし、トックリ形の蓋など東北北部の十腰内I式（磯崎正彦、1964）にみられるような器形が併なってくるようである。文様は体部文様帯（II文様帯）に施されるが、文様帯が上下を区画されたものになり、体部上部に集約される傾向をもっている。この点で第3群土器と異なってくる。十腰内I式も同じく見受けられる（磯崎正彦、1964）。文様は細い紐のような磨消織文であり、溝巻文、同心円文を中心にしていろんな方向に連結していくが、全体としてカステードチーフでくりかえされる。この点、第3群や第5群およびその仲間とは異なる。また磨消織文の要所には円棒状工具による刺突が加えられる。この刺突は器面に対して直角に施したもので独特なものである。

この土器グループは県内各地でみられるが、どちらかというと從来は加曾利B式併行の仲間とみられてきたようであるが、その独自性を見逃がし易い。鶴岡市谷定遺跡、越海郡遊佐町丸池遺跡（第1図8）、村山市河島山遺跡（第32図13）、村山市土生田南沢遺跡（第32図11、14）、最上郡真室川町小川内遺跡（第32図10）、山形市谷柏遺跡（第32図12）などにみられる。この土器には内面に沈線文（平行沈線文、格子状文）を有する土器が併なっている。全般に無文化の傾向が強く、外面が研磨されるものもある。谷柏遺跡の土器は（第32図12）、堀之内II式そのものといってよいほどである。粗製土器としては斜糸文をもつ第4類土器、刷毛目文の17類土器などが併なうと思われるこの土器は堀之内II式に併行し、十腰内I式の仲間であろう。

#### 第5群土器 Aグループ（第33図1～3）

この土器は、第5群a類、c類、d類をまとめて説明したい。前記の分類が複雑になってしまったので、ここで訂正させていただく。この点、お詫び申し上げる。

a類土器は、深鉢、鉢が主体であり、他に注口、蓋がある。器形に大きな特色があり、口縁が大きく齊曲しながら開き、頭部でくびれ、肩の張る丸みを帯びた胴部にいたる。そして、さらに口唇内部に肥厚する。関東の加曾利B式（岡本、戸沢、1965）にみられる器形である。宮城県の宮戸II式（後藤謙彦、1962）にもみられる。第4群土器までとは異なる。蓋形においても第4群の長頸風のものではなく、肩部の張った蓋である。文様帶もロ線部文様帶（IIa文様帶）と体部文様帶（II文様帶）に区別され、深鉢、鉢ではロ線部文様帶に主体があり、帯状磨消織文に加えられたS字状沈線文が特色ある。蓋、注口には体部文様帶に平行沈線文に加えられたS字状沈線文がみられる。全般に無文化される傾向が強く、主文様帶以外の部分は磨消研磨化されることが多い。このa類は本県ではいたる所に存在する。庄内地方では、抱海郡八幡町安室山遺跡、鶴岡市谷定遺跡（第33図1）、山形市上野遺跡（第33図2）などである。ここで問題なのは、この“S字状沈線文土器群”的仲間が東日本一帯に分布しており、関東では加曾利B式、北陸北半では三仏生式（中村孝三郎、1957）、宮城県では宮戸II式、東北北部では十腰内II式（磯崎正彦、1964）として出現していることである。即ち、あまりに差異のない土器が分布し、土着の土器そのものの輸入品かということである。本遺跡の資料では区別つかない。もっとも組成で判別しなければならないが。

c類土器は浅鉢、皿形のもので内部に帯状磨削繩文や連續刺突文を有するが、外面は無文研磨化される。口縁が大きく開くことによって現われる技法であると思われるが、加曾利B式併行期の土器によくみられることがある。

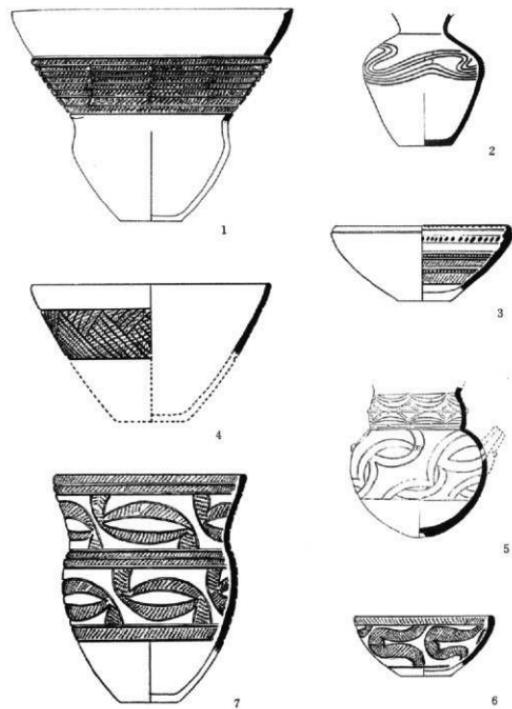
d類土器は、口縁の大きく開く体形であり、口縁部文様帶（II a 文様帶）に帯状磨削繩文を施し、その上に格子状（網目状）または羽状の沈線を加えている。このような文様手法は加曾利B式にみられる。帯状繩文や格子状沈線のあり方から考えて加曾利B式の段階に位置づけられるようである。

このようにみてみると、第5群a類、c類、d類土器は極めて関東の加曾利B式的な色彩の濃い土器群であるとみられるのである。c類土器やd類土器の仲間は今のところ他の遺跡では確認されていない。さて、このグループに伴なう粗製土器としては、斜繩文を有する第4群土器、刷毛目文を有する第18類土器、無文の第20類土器が考えられるが、あまりはっきりしない。  
**第5群土器** Bグループ 口縁が大きく開き外脛し、頂部でしまり、胸部でふくらむ深鉢、鉢である。口縁内部に肥厚し、大字く波をうつ波状口縁の上に精巧な藝術的口縁把手がつく。文様は口縁部文様帶および、部文様帶に施される。文様は曲線に富む、のびのびと展開する唇消繩文であり、無文部分とそれを区画する沈線間に棒状工具の刺穴による連續刺突文を有する。この土器は、第5群Aグループと大変共通点が多いが、県内各地ではあまり出土例を知らない。そのため、全体的に下明な点も多い。おそらく、宮戸II a式や加曾利B式に併行するであろう。S字状沈線文土器に混じって出土するようである。しかし、東置賜郡高畠町跡ヶ越遺跡（佐々木洋治、1971）などにも少しみとめられるという。関東や新潟地方においても少量認められるらしい。おそらく東北的な、特殊な土器なのであろう。粗製土器はAグループと同じであろうか。

**第6群土器** 形形からみて第5群Bグループなどとはほぼ同じである。口縁把手が殆んどみられず、胴部は全体に丸味を帯びてくる点で異なる。大きくゆるやかに波をうつ波状の口縁が多い。文様の主体は口縁部文様帶にあるが、胴部文様帶にも文様が施される。非常に曲線に富む唇消繩文で大きくのびのびと施される。地文となる繩文が特長的で、折りかえし地文による模倣の羽状繩文である。磨消繩文の区画部は刺突風の連続刻目文で縁どりしている。

この土器は、東北南部宮城県地方で宝ヶ峰式（伊東信雄、1956）あるいは宮戸II b式（藤原勝彦、1962）の名で呼ばれた仲間であり、東北北部青森県地方では十勝内田式（磯崎正彦、1964）と呼ばれる土器の仲間である。関東の加曾利B式は、これらとやや異なる内容をもつており、東置賜郡高畠町神立洞窟遺跡（佐々木洋治、1971）で発見されている。この土器群は、越後郡遊佐町三崎山遺跡、鶴岡市谷定遺跡をはじめ県内各地で発見されている。粗製土器としては、羽状繩文の第12類土器などがあるだろう。

**第7群土器** (第33図5~7) 断片的であるが、器形は第6群土器に殆んど同じである。文様に特色がある。主体となる深鉢では口縁部文様帶、胴部文様帶に入組磨削繩文が施される。曲線的な、先祖返り形態の「コ」の字形の入組文であり、羽状繩文や刷毛目文が地文として施



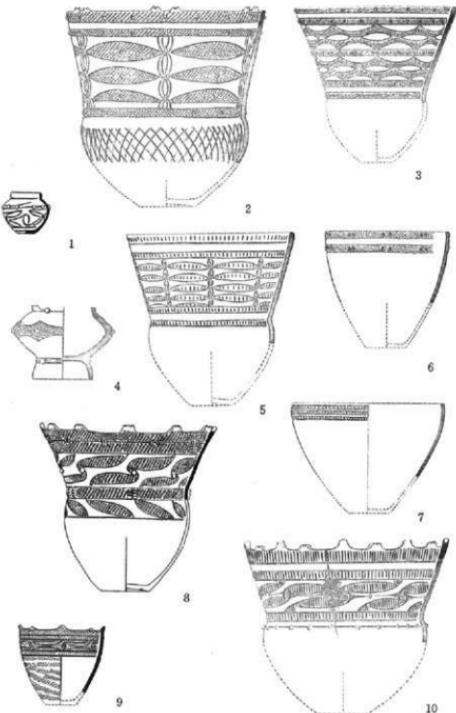
第33図 県内各地の後期中業の土器群 (1. 7 鶴岡市谷定遺跡、2 山形市上野遺跡、3~4 神矢田遺跡、5 山形市大森遺跡、6 高畠町石ヶ越遺跡) — 縦尺 1/8

される。また、あたかもテープを器面にまきつけたかのような細い帯繩文もある。注口土器はきわめて特異なもので、珠状にふくれあがった丸味のある器形である。文様は細い微隆線、つまりいわゆる「みみずっ張れ状文」による入組文である。ボタン状の貼面が口辺などの要所に貼付される。山形市大森遺跡（安孫子昭二、1964）（第33図5）のようにテピカルな資料を出土する遺跡は少ないが、各遺跡で広くみられる。庄内では、鶴岡市谷定遺跡の糞村（第33図7）が良好である。この土器群は、いわゆる新地式（山内清男、1964）と呼ばれる土器の仲間であり、安孫子論文の貼瘤文土器の第1段階（安孫子昭二、1969）にあたる。宮城県の西ノ浜式（後藤勝彦、1962）とも共通するが、少し趣がさがっている。両者の関係はわからないが、県内では西ノ浜式は見られない。東北北部の十勝内V式にもあまり見当らないようである。粗製土器としては第5群土器があげられよう。

**第8群土器**（第34図1～4）主体となる深鉢は、口縁の開いた頸部でしまる胴張りの器形で、第7群土器と殆ど同じであるが、全体にふくらみがゆるんでくるらしい。文様は口縁部文様帶（II a文様帶）が主体で胴部文様帶（II b文様帶）は粗略化され、無文化しているものが多い。この点第7群土器と異なる。文様は、磨消繩文による入組文であるが、「弧線連続文」の形態をとるものが多い。文様帶を区画する縦文帯や入組文の筋節部に點瘤文を施すものがあり、貼瘤が多くなってくる。体部文様帶の粗略化に伴ない、格子状沈線文を有するものがある。この第8群土器も断片的であるが、復元推定を行なうことができる。庄内地方では、鶴岡市谷定遺跡・同高田遺跡（第34図4）や抱海郡佐庭町三崎山遺跡（第34図1）に好資料がある。また點としても、上山市沼田遺跡でテピカルでよくまとまった資料（第34図2～3）がある他、東置賀郡高畠町平柳遺跡（佐々木洋治、1971）などによく見受けられる。この土器群は安孫子論文の「第II段階」に相当し、宮戸III式（後藤勝彦、1962）、岡山の安行I式（岡本、平沢、1965）に併行するものとみられる。他の深鉢以外の器形や粗製土器についてはあまりいい資料がないが、第5群土器などは、その土器群に併なってくるものと考えている。

**第9群土器**（第34図5～7）主体となる深鉢の器形は、口縁が背曲せずに立ってくる。文様は殆んど口縁部文様帶に集約され、胴部は無文化されるものが多い。頭部のくびれの深鉢は入組文化した弧線連続文、頭部がくびれない深鉢、鉢は磨消繩文による帯状繩文もしくは沈線文のかわりに割目文を用いるものが多い。第1次～第5次調査では、繩文のものが多かったが、第3次～第5次調査では割目文のものが多い。口縁や頭部に貼瘤小突起が多用され、二三単位のものなど複数単位で施すものが多い。この土器群は第8群土器と第10群土器の中間に特色をもち、あまり多くないが、上山市沼田遺跡（第34図5～7）、山形市下宝沢遺跡（第34図5）などにテピカルな資料があるので区別した。最初に注目したのは安孫子昭二氏であり、安孫子論文の第III段階にあたる。宮城県においても一群の土器としてほぼ同じ内容の土器を把握している（斎藤良治、1968）。庄内地方では、鶴岡市谷定遺跡で若干発見されている程度である。

**第10群土器**（第34図8～10）主体となる深鉢の口縁部がやや小さくなるものが多くなり、



第34図 県内各地の後期後業の土器群（1 佐庭町三崎山遺跡、2～3 上山市沼田遺跡、4 鶴岡市高田遺跡、5 山形市下宝沢遺跡、6 平田町高畠遺跡、7 神矢田遺跡、8 鶴岡市谷定遺跡）一縮尺 1/8

口部、突起部の肥厚するものが多くなる。文様は口縁部文様帯に集約され、上下に扁平化された磨削織文による入組文が施される。地文は織文によるものが多く、入組が2段になるものが多い。織文の代わりに刷毛目風の刻み目を用いたものがあり、多段の入組文になるものが多い。口縁、頂部の織文帯には比較的大き目の張り出しが貼付するものが少しみられ、口縁突起の下部や入組文の結合部に三叉状の陰刻が施されるものが多い。

この土器群は本遺跡では殆ど深鉢であるが、注口や變形土器もそれらしい破片がある。庄内地方では、鶴岡市谷定遺跡（第34図10）・施海郡平田町高畠遺跡（第34図8）などティカルな土器を出土する遺跡がある。県内では東置賜郡高畠町石ヶ森遺跡などたくさんの遺跡においてこの土器群を見発見することができる。この土器群は安孫子論文の第15段階に相当し、宮戸田B式（後藤彦彦、1962）に併行するものとみられる。東北北部では十勝内V式（磯崎正彦、1964）に併行するであろう。粗製土器としては、斜織文の第5類土器、羽状織文の第13類土器、無文の第20類土器が併なうものとみられる。

以上のように第1群土器より第10群土器までその編年的位置をみてきたが、本遺跡の出土土器は殆ど破片であるため、遺物の説明では少し繁雑であるけれども詳細にその特徴を復元して考えることができるように述べたこともあって、群としての特徴の要点を加えて述べてきた。また、本遺跡の出土土器は断片的なものが多く（量は多いが）、層位的な裏付けも不充分なので、県内、とくに庄内地方の生土器をあげておいた。さらに他県の資料との比較も加えなかったが、紙面の都合もあり、ほぼ時間的な位置づけにとどめざるを得なかつた。

## 2. 晩期織文式土器グループの編年

東北地方の晩期織文式土器は、いわゆる「亀ガ岡式土器」の範囲に入る。「亀ガ岡式土器」は山内清男博士により六型式による編年がうちられており（山内清男、1937）。この編年には問題がないわけではないが、一応確定した編年といえる。「亀ガ岡式土器」の仲間は本県においても多数分布しており、神矢田遺跡も同じで、第11群～第16群土器がそうである。この六群の土器の編年的位置づけを考えてみよう。

**第11群土器**（含、粗製第6類土器、第14類土器、第21類土器）玉抱き三叉文・三丈状縫刻・魚眼状文などが磨削織文とあわせて用いられるグループは大洞B式に相当する<sup>g</sup>、細分して大洞B式とよばれている土器である。磨削織文とあわせて用いられない、いわゆる三叉状入組文を施したグループは大洞B式に相当するも大洞B式とよばれている土器である。（山内清男、1964）

**第12群土器**（含、粗製第6類土器、第14類土器、第21類土器）いわゆるシダ状文を有する土器を中心とする土器群で、大洞B-C式に相当する。これも詳細に区分すれば分けられるであろう。粗製土器は第11群土器に併なうものと、第12群土器に併なうものの区別しにくいけれども、本遺跡ではこれを区別することとすれば、層位学的方法や単純包含遺跡の資料の力を借りる必要があろう。

**第13群土器**（含、粗製第7類土器）x字状文・大洞骨文などを有する土器を中心とする土器群で、大洞C式に相当するものである。粗製土器として共存の可能性が確実なのは第7類土器だけである、無文土器などよく伴ないかもしれないが、現在のところ不明である。

**第14群土器**（含、粗製第8類土器、第9類土器）平行沈線文を有する土器を中心とする土器群で、大洞C式に相当するものであろう。e類土器などは、大洞C式の仲間でもかなり大洞A式に近いもので、大洞C式と大洞A式との中间的な特徴をもつものであろう。粗製土器にも平行沈線文を口辺に有する斜織文土器が多い。

**第15群土器**（含、粗製第10類土器）工字文を有する土器群であり、大洞A式に相当するものである。

**第16群土器**（含、粗製第10類土器）変形工字文を有する土器群であり、大洞A式に相当するものである。

以上のように本遺跡の晩期織文式土器第11群～第16群土器の編年的位置について概略的に述べてきたが、本来ならば考察を詳しく述べるべきである。それをあえてしなかったのは、紙数の都合と、本遺跡の問題の強さ、亀ガ岡式土器の研究の状況を考えてのことである。しかし、この6群の晩期織文式土器は、近い将来において晩期織文式土器の研究に用いられることがあろう。そのときまでお許し願いたい。

## 3. 織文式時代から弥生式時代への移行期の土器群

第17群土器は、一種の変形工字文をもつ鉢および台付鉢、帶状磨削織文をもつ鉢などである各群形セットの一部分であり、すべてを含むものではないが、群形の上から見ても大洞A式の範疇を脱したものである。また、文様も変形工字文十纏文であり、大洞A式の範疇はない。宮城県鹽沼遺跡（1972）の出土土器とよく類似しており、織文式時代晩期大洞A式の域を出るものである。磨削織文を有する福島県下屋式もしくは、櫛倉式に近い特徴を示すものと比較的あらっぽいテイテに近い織文を施す砂浜式に近い特徴を示すものがある。发掘においてこのような土器が出土したのは庄内地方では初めてのことであり、類例が殆どないという状況にある。この土器群とそれに併なうとみられる粗製土器の第11類土器についてさらに検討する必要がある。

## 4. まとめ

以上のように本遺跡出土の17の土器群の編年的位置を考察してまいだが、限られた範囲の中で充分に述べることができないことを残念に思う。しかし、ここで述べられなかったことは、できる限り近い将来において補充の機会をとりたいと考えているので、お許し願いたい。

上述の織文後期の9群の土器については、庄内地方を中心とする山形県において研究が立ち遅れている（その責は筆者の負うところが大きい）。現状を考えると、少なくとも庄内地方ぐらいの範囲では、当分の間型式編年研究の指標として用いるに耐えるものと思う。即ち、庄内地方における後期織文式土器の編年は、当分の間は、神矢田2群→神矢田3群→神矢田4群→神矢田5群→神矢田6群→神矢田7群→神矢田8群→神矢田9群→神矢田10群として用いても

よいであろう。近い将来において、鶴岡市谷定遺跡をはじめとして県内各地の資料を扱った研究が発表されるものと思う。そのときには、このふみ台は新しい姿のものとなり、「型式」として把握されたものになるであろうと信ずる。

さて、この17群の土器を、先の報告や県内主要遺跡との関連を概略的にまとめれば第4表のようになるであろう。

また、この17群の土器を、県外の後・晩期縄文式土器と対比すれば、第5表のようになろう。この表によって神矢田の17群の土器の位置をあらためて確認しておきたい。

註1 「外縁」とするより、「内縁」というべきかもしれない。ここでいう「外縁」とは、口縁が開いて一たん外へ広がって内側へ彎曲する形態を意味する。

- 2 米沢市童森地区在住の手塚孝氏の資料で大変よくまとまっている資料である。
- 3 鶴岡市谷定遺跡は、昭和43年に庄内考古学研究会で発掘を行なっており、本格的な遺物研究を行なうため、筆者がその任にあたっている。筆者の力量不足からその結果を公表する段階にいたっていないが、もう少しのところでその實を果せそうである。庄内地方では神矢田遺跡以上に良好な縄文後期の遺跡である。
- 4 米沢市上竹井遺跡は、発見者手塚孝氏の採集品を拝見したところ、堀之内式併行期の良好な資料であることが判明した。堀之内併行期の土器編年研究にかかせない重要な内容をもっている。
- 5 安孫子論文の五型式四段階による把握に筆者は傾倒しているが、四段階はそれぞれ、これまで私たちが地域色ある土器の型式として考えてきたところの型式の段階をも指すものと考えたい。純型理論は本稿では複雑になるので控えてとりあげない。一方的な引用のしかたになると思うが、それは筆者のいたらなさであろう。

第4表 神矢田出土の土器分類と同タイプの土器を出土する県内各地方の代表的遺跡

おいて、鶴岡市谷定遺跡をはじめとして県内各地の資料を扱った研究。そのときには、このふみ台は新しい姿のものとなり、「型式」であろうと信ずる。

先の報告や県内主要遺跡との関連を概括的にまとめれば第4表の

県外の後、晩期繩文土器と対比すれば、第5表のようになろう。両の土器の位置をあらためて確認しておきたい。

「内脛」というべきかもしれない。ここでいう「外脣」とは、口へ広がって内側へ脣曲する形態を意味する。

手塚孝氏の資料で大家よくまとまっている資料である。

昭和43年に庄内考古学研究会で発掘を行なっており、本格的な遺物収集者がその役にあたっている。筆者の力量不足からその結果を公表しないが、もう少しのところでその實を果せそうである。庄内地方に良好な纏文後期の遺跡である。

発見者手塚孝氏の採集品を拝見したところ、楕之内式併行期の良いと判明した。楕之内式併行期の土器編年研究にかかせない重要な内容

四段階による把握に筆者は傾倒しているが、四段階はそれぞれ、こもる土器の型式として考えてきたところの型式の段階をも指すも裏論は本稿では複雑になるので控えてとりあげない。一方的な引用うが、それは筆者のいたらなさであろう。

神矢田表記	神矢田第1次～第2次調査				神矢田第3次～第5次調査				神矢田	県内各地方別代表的遺跡			
	精製分類(類)	粗製分類(類)	精製分類(類)	粗製分類(類)	精製分類(類)	粗製分類(類)	最終結果(部)	庄内地方	最上地方	村山地方	置馬地方		
1	1 2	1	1	1	1 15 16		1	越佐町小山崎	大藏村白須賀	東根市猪野沢	米沢市堂森B		
	3	2	2	(2 15 16)			2	(神矢田)		村山市金仏塗	米沢市上竹井		
2 3	4	2	3	2 15 16			3	鶴岡市谷定 越佐町三崎山	真室川町小川内	山形市谷柏	米沢市上竹井 高畠町宮下		
4 5	6	3	4	3 17			4	鶴岡市谷定 越佐町三崎山	真室川町小川内	山形市谷柏	村山市土生田		
6	5 7	4	5	4 18 20			5	鶴岡市谷定 越佐町丸池		山形市上野	米沢市金谷 高畠町神立洞窟		
	8	4	6	4 12			6	鶴岡市谷定 越佐町三崎山			高畠町神立洞窟		
	9	5 6	7	5			7	鶴岡市谷定		山形市大森	高畠町石ヶ森		
7	10	6 7	8	5			8	鶴岡市谷定 鶴岡市高田		上山市沼田	高畠町上平柳		
8	11 12	6 8	9	5 13 20			9	鶴岡市谷定		上山市沼田 山形市下宝沢	高畠町上平柳		
9	13 14	9	10	5 13 20			10	鶴岡市谷定 平田町高畠		村山市作野	高畠町石ヶ森		
10	15 16	9	11	6 14 21			11	羽黒町玉川 平田町高畠	真室川町小川内	村山市薦並宮の前	高畠町石ヶ森		
11	17	9	12	6 14 21			12	羽黒町玉川 平田町高畠	大藏村白須賀	村山市湯沢ハバ	(付)		
12	18	9	13	7			13	羽黒町玉川 平田町高畠	新庄市宮内	東根市花岡	高畠町上平柳		
13	19	9	14	8 9			14	羽黒町玉川 平田町高畠	新庄市宮内	東根市花岡	(付)		
14	20	9	15	10			15	越佐町三崎山 (神矢田)		東根市蟹沢	高畠町尼子岩森		
15	21	9	16	10			16	(神矢田)	大藏村上竹野	東根市蟹沢	高畠町神立洞窟		
		9	17	11			17	(神矢田)	大藏村上竹野	東根市蟹沢	高畠町日向洞窟		

イ 神矢田第1次～第2次調査の精製5類土器は中間報告では4群土器と考えて加えたが、むしろ5群土器の仲間に加えるべきだと考え訂正してある。

ロ 県内地方別代表的遺跡としてあげたものには、文献を利用したものが有る。

●愛上地方の晩期遺跡と村山地方と猪野沢と蟹沢遺跡は、柏倉亮吉(1970)「山形県史考古資料編」による。

●高畠町関係は佐々木洋治(1972)「高畠町史考古資料編」による。

●山形市大森遺跡は、安孫子昭二(1964)「山形県・大森発見の注口土器について」上代文化第34號による。

●その他は県内各地の資料保管者に拝見させていただいたものであり、お世話になった酒井忠一(玉川、高畠、三崎山、丸池の各遺跡)、高畠中学校(高畠遺跡)、柏倉亮吉(愛上地方、村山地方)、吉田茂、村山市公修(村山市三崎山遺跡)、手塚孝(高畠B遺跡、上竹井遺跡)、奏昭(金谷遺跡)の諸氏には深く感謝申し上げる次第です。